



二人は探偵

八島 聖彦

五冷

目次

自由のない天使	1
妄想の悲劇	9
平成の女たち	16
愛と疑惑	26

自由のない天使

港区芝浦にて、芝浦探偵社に勤務する探偵の竹本祐介(たけもとゆうすけ)は大学中退後に職を転々としていた時に27歳にして芝浦探偵社に就いた。ぼさぼさ髪の中肉中背の祐介は、芝浦探偵社にやっとあり着いた定職だったので定年までやり遂げようと36歳までやってきた。祐介は30歳でゆりかもめ線のモノレールが走ってる港が近い芝浦で小さな雑居ビルの2階にある芝浦探偵社でノウハウを身につけて、自分の探偵事務所を立ち上げるために浮気調査と家出所在調査と行動調査と企業調査と盗聴器調査と嫌がらせと身辺調査と証拠調査の依頼を受けてきた。芝浦探偵社に元週刊誌記者でカメラマンである相棒の安井智宏(やすいともひろ)という助手のアシスタントがいる。黒縁眼鏡をかけた真面目そうな智宏は35歳になるまで芸能人の不倫現場や殺人鬼の捕らわれた瞬間をスクープしていたが、それを除外した芸能人にCG加工の合成と表明されてスキヤンダル潰しにあつて自我を壊されて週刊誌記者を辞退した。祐介は芝浦探偵社で今日もまた新たな案件で浜口亮一(はまぐちりょういち)という45歳の中年男性が依頼に訪れた。亮一は祐介に、「毎週火曜にギター教室のレッスンが終わった後でいつも愉しみにしていた海岸通りにある寿司屋の魚べえでにぎり寿司を食べてたら3人の警官がやってきて、『店員に声をかけたりしなかった?』と尋ねた。僕は心当たりのある女子の店員を思い出して、『わかりました』と言って、寿司を完食後にレジ精算を済まして荷物確認されて2人の刑事に引き渡されて店を出て、2人の刑事と僕の後ろに3人の警官が警護について覆面パトカーがあるとどこまで歩いて2人の刑事と警官と一緒に覆面パトカーに乗って警視庁芝浦署に連行された。生活指導室で今岡刑事に、『すごい歳の離れた人から話しかけられて目の前を通るたびに一生懸命に見られた聞いています』と尋ねた。僕は正直に、『興味があったから!』と答えた。そして、今岡刑事は、『逆に女子高生からそんな歳の離れた人から声かけられたら

どう思うか？ いやだと思いません』と聞いた。僕は、『いやです！ その子がそんなふうに思ってるとは思わなかった。でもその子はマスクをかぶって顔を半分しか見たことないから、そんなに思っていない！ マスクを外すと印象が変わるからな！』と答えた。今岡刑事は、『いやっ！ わからないぞ！ もしも顔が自分の好みだったら、そこからつきまといになるかもしれない！ だからまたあそこのお店に来たらストーカー扱いする』と言った。羽鳥刑事は、『魚べえの店長は二度と出入れしなければ、そこまではいいわかないっていたので反省文を書いたら、もう帰っていいんで』と言って帰ることができた。僕は常連客なのに警察を呼んで出入り禁止された理由が理解できずにいた。その子の身になかなかたか行動を調べてもらいたい。夏が終わってから雰囲気違っていった！』と言った。祐介は、「わかりました。魚べえの女子店員の歳いくつぐらいでしたか？」と聞いた。亮一は、「1年前に、『高校何年生？』と聞いたから、『高二です』と答えたから、今が高三なんで17才か18才だろう。その子は僕の質問に答えたあとで、『いっぱい食べて！』と可愛い声で言って去りました。祐介は、「女子店員の名前を知ってますか？」と聞いた。亮一は、「知ってます。名札を見たら大和田でした」と答えた。祐介は、「そうですか！ 他になにかわっていることがあれば？」と聞いた。亮一は、「その子がお母さんと一緒に魚べえで食べにきていたときがあって、1週間後に魚べえで食べていたときに、『こないだ！ お母さんと一緒にきてなかった？』と聞いたら、『1週間前のことだから忘れた！』と知らないフリをして隠すように言っていた。普通なら友達同士で食べにくるだろうと思って変わってると思った。祐介は、「他にないですか！ あとはこっちで調べておきます』と言った。亮一は、「お願いします』と言って探偵社から出ていった。祐介はこの案件で人の裏側に踏み入れたら危険を伴うかもしれないと思いつながら探偵社を21時過ぎで閉店をして帰宅した。祐介は港区の高級マンションに住めず日本一治安が悪い大阪の西成区のごみの山があるスラム街と同じ東京の山谷の近くにある足立区の集合住宅のぼろアパートに住んで毎日のように電車で1時間かけて芝浦探偵社まで通っていた。祐介は久しぶりにピザ屋でデリバリ注文したMサイズのハワイアンデライトのピザとグアバのドリンクが届いてピザをほおぼってドリンクを一気飲みして腹こしらえし施した。祐介は歯を磨いてお風呂に入ってテレビを見てベッドに横たわると気がついたら眠っていた。翌朝に起きた祐介は昨日の夕方頃に依頼を受けた調査で夜に張り込みして追跡するのに緊張感を覚えた。祐介には自分の探偵事務所を開いてたくさん依頼を受けて大富豪となって芝浦ケープタウンに住むことが夢だったためにどんな依頼も引き受けてきた。祐介は今日がちょうど火曜日の夕方頃に魚べえに入って中トロと大トロとびんちようまぐろとサーモンののったシャリの小皿を何枚も平らげてお茶を飲んだ。タブレットを使って注文したら名札に大和田と書かれた女子店員がドリンクを持ってきた。祐介は確かにマスクをかけていたら口元が隠れて顔全体の印象がわからないが、目元だけだと眠たそう優しい瞳をして可愛らしい子だと思った。祐介は亮一と同じで家庭を持たない独身で天使に愛を求めていつてしまったのに理もないと感じた。レジで精算を済ましてお店から出て、魚べえの向かい側にあるビル2階のファミレスのテラス窓から様子を伺って見るために張り込んだ。祐介は深夜22時を過ぎて大和田さんがバイトが終わってお店を出てきたら急いでレジで精算を済ましてファミレスから出て、階段を降りていて大和田さんを追っていた。祐介は18才で成人の時代なのに22時でバイトを上がってくるということは17才なのか、それとも終電に間に合わないほど遠いところから通っていると思いつながら大和田さんを見失わないように尾行していった。祐介はよく考えたら、魚べえは21時で閉店して、あとの残り

時間はレジの集計と掃除だろうと思っていたら、大和田さんが都営三田線の三田駅から地下鉄に乗って六つ目の人形町駅に降りて東京メトロ日比谷線の人形町駅から八つ目の北千住駅まできたら北千住駅から東武スカイツリーラインに乗り換え不要で四つ目の西新井駅に降りた。祐介は偶然に大和田さんと近いところに住んでると驚きながら大和田さんを尾行していった。祐介は大和田さんの跡を追って20ほど家が立ち並んだ狭い路地の角を曲がったところのおんぼろアパートのたんぼぼ荘の2階の一番奥の部屋に入っていた。祐介は大和田さんの住所を知ることができたので明日の朝からたんぼぼ荘の近くで張り込み足立区役所で個人情報データを収集できないから、どこの高校に通っているか追跡して学校の生徒に聞き込みして、個人情報収集しようと考えた。祐介はすでに芝浦探偵社の閉店時間を過ぎていたので西新井駅から電車に乗って北千住駅まで行って、北千住駅から東京メトロ千代田線に乗り換えて地下鉄に乗って綾瀬駅に降りて帰宅した。翌朝に起きた祐介は、顔を洗ってジャムパンを食べて牛乳を飲んで歯を磨いて服に着替えて家から出て綾瀬駅から地下鉄に乗って北千住駅まで行って、北千住駅から乗り換えて電車に乗って西新井駅に降りた。祐介は朝6時頃たんぼぼ荘に着いて1時間ぐらいで大和田さんが部屋から出てくるだろうと思ってブロック塀の隅に隠れて張り込んだ。祐介はぼーっとしている間に6時頃に大和田さんが部屋から出てきてたんぼぼ荘の2階から下りてきた。祐介は大和田さんを尾行して西新井駅から電車に乗って北千住駅で乗り換え不要で東京メトロの日比谷線人形町駅に降りて都営浅草線に乗り換えて地下鉄に乗って赤羽駅に降りて改札を出て階段を上って地下鉄出口を出て歩いて大和田さんを尾行して大和田さんが私立三田高校の正門に入っていた。祐介は偏差値65の進学校の三田高校なら大学に行けるレベルだと思いながら大和田さんの下校時間まで芝浦探偵社に出社して仕事することにした。祐介は智宏に、「今日15時頃に車を出すから運転を頼む！ 三田高校の正門で生徒たちに聞き込みするんで学園内だから不信に思われて通報される場合があるかもしれないのでどこかで車で待機していてくれ！」と言った。智宏は、「わかった！ 探偵社の車は社長が使ってるから自分の車を出す」と言った。祐介は、「よろしく！ それとなにか証拠を捉えられることがかもしれないのでカメラを忘れずに！」と言った。智宏は、「わかってる！ カメラは必需品なんで忘れない！ 商売道具なんでもつも携帯してる」と言った。祐介は昼飯のランチを済まして昼が過ぎて15時になったので安井と一緒に三田高校へ向かっていった。三田高校の正門近くに着いた祐介と智宏は生徒たちが正門から出てくるまで車で待機した。10分ぐらいしたら生徒たちが現れ始めたので祐介は智宏に、「車で待っていてくれ！ 駐禁になったり通報されたりしたらいけないんで！ なにかあったときは連絡する！」と言って車から降りた。祐介は3人組の生徒の一人に、「すいません！ 芝浦探偵社の者ですが、大和田って子を知っていますか？」と聞いた。生徒の一人は、「知らない！」と答えた。祐介は、「その子は3年生です！」と言った。生徒の一人は、「私たちは1年だから知らない」と言ってその場から離れた。祐介は他の生徒のひとりに、「すいません！ 芝浦探偵社の者ですが、大和田って子を知らない？」と聞いた。生徒の一人は、「もしかして瑠夏のことか！」と答えた。祐介は、「その子は名前は瑠夏っていうんだ！ 3年です」と言った。生徒の一人は、「はい！ そうです！ 同じクラスなんで！」と言った。祐介は、「大和田さん家庭状況を知ってる？」と聞いた。生徒の一人は、「確かお父さんが早くから亡くなって母子家庭で貧しくて大学進学を奨学金でいこうかと悩んでいた」と答えた。祐介は、「ありがとう！ 大和田さんについて情報を知りたかったのですいません！」と言った。生徒の一人は、「瑠夏の身になにかあった！」と言った。祐介

は、「いや！ 大したことじゃないんで気にしないで！」と言ってその場から離れた。正門の近くで祐介は、正門から出てくる大和田さんを見かけて気づかれないように大和田さんの跡を追っていった。祐介はコロンで甘い香りのする大和田さんの後を追った途中で大和田さんが公園内にある公衆の女子トイレに入ってしまったら、紺のブレザーと白いブラウスと赤いリボンと淡いグレーのプリーツスカートの制服から私服に着替えて公衆の女子トイレから出てきた。祐介は正門から300メートル歩いてきたところで大和田さん黒いセダンに乗っていった。祐介は智宏に、「早く車を出してくれ！」と言った。智宏は、「今どこにいる？」と聞いた。祐介は、「そこをまっすぐいって曲がったとこだ！」と答えた。智宏は、「了解！」と言って車を動かした。祐介は智宏が動かした車に乗って、「あの信号で止まってる黒いセダンを追って！」と言った。智宏は、「あれな！」と黒いセダンを追っていった。祐介は、「今日は魚べえのバイトは休みなのか！」と思いつながら黒いセダンを追っていったら同じ港区で近い六本木ヒルズの地下にある駐車場の入口に入って、黒いセダンが駐車場に停めた。祐介は黒いセダンの斜め向こうに車を停めて黒いセダンから大和田さんが誰かに連れて出てくるのを待っていたら、運転席から謎の中年男と一緒に大和田さんが降りてきた。智宏は気づかれないように謎の中年男と大和田さんが一緒にいるとこを自分のカメラで何枚か写真を撮った。祐介は、「あの謎の中年男は魚べえの店長じゃなかったか！」と思って直ぐに智宏と一緒に車から降りて店長と大和田さんの跡を追っていった。祐介は店長と大和田さんは地下2階の駐車場からエレベーターで1階へ上がっていったら智宏と一緒に非常階段で1階へ上がっていった。祐介は黒髪でショートヘアの大和田さんがブティックに入って大和田さんが店長に何かをおねだりしているように見えた。智宏はまた気づかれないようにして店長と大和田さんが一緒にいるとこを何枚か写真を撮った。祐介は大和田さんが援交かパパ活をやっているのかと思いつながら駐車場に置いた車に戻って店長と大和田さん戻ってくるまで車で待機した。あれから1時間ほどして大和田さんが店長から洋服を買って貰ったと思われる手さげ袋を持って店長と一緒に黒いセダンに戻ってきた。智宏は黒いセダンが動き出したので慌てて車を動かして黒いセダンを追っていった。祐介は黒いセダンが地下の駐車場の出口から出て、黒いセダンを追って駐車場を出てきたら、秋の季節で陽が暮れるのが早くなって、外は暗くなっていた。祐介と智宏は車で黒いセダンを追って東京タワーが見えるビルとビルの間を通過していった。祐介は黒いセダンが三田駅の地下鉄入口の付近で大和田さんが黒いセダンから降りたら、三田駅の地下鉄入口に入って階段を降りた。祐介と智宏はそのまま車で芝浦探偵社に戻って書類整理などをして退社した。祐介は三田駅から地下鉄に乗って人形町駅で東京メトロ日比谷線に乗り換えて北千住駅から綾瀬駅に着いた。綾瀬駅からぼろアパートの自宅へ向かった途中でいつものコンビニで弁当とドリンクとゼリー飲料を買ってコンビニを出て歩いて自宅に着いた。祐介は明日、大和田さんの下校時に直接会って昨日の夜に魚べえの店長と一緒に六本木に買い物にいった証拠写真を叩きつけて真相を暴く予定をした。祐介は弁当を食べてドリンクを飲んだらゴミの分別して片付けて歯を磨いてお風呂に入って横たわっていると、眠っていた。翌朝に起きた祐介は、いつものいちごジャムパンを食べて牛乳を飲んでゼリー飲料を飲んだら歯が磨いて洋服に着替え家から出て綾瀬駅から地下鉄に乗って北千住駅で乗り換えて北千住駅から日比谷線の地下鉄に乗って行って、人形町駅で乗り換えて人形町駅から都営浅草線の乗って三田駅に着いた。祐介は三田駅から歩いていつもと変わらずに芝浦探偵社に出社して15時まで新しい案件の下調べをした。祐介は15時になって三田駅から大門駅で降りて大

江戸線に乗り換えて赤羽橋駅で降りて三田高校へ歩いて向かって行って、三田高校に着いたら下校時間まで正門近くで大和田さん出てくるのを待った。祐介は直ぐに生徒たちが正門から出てきたら通りゆく生徒たちの顔を見て大和田さん探した。祐介はやってくる生徒たちはマスクをかけていても可愛い瞳に目力のある大和田さんを見つけたら直ぐに呼び止めた。祐介は瑠夏に、「すみません！ ちよっといいですか？」と聞いた。瑠夏は、「えっ！ なんですすか！」と答えた。祐介は、「芝浦探偵社の竹本です。以前魚べえの客としてきた浜口亮一という人物が君に不快な思いをさせて店長に報告された事で店長が警察に捜査願いを出して、いつもと変わらず客としてきた浜口さんが補導された件について聞きたい！ 少しの間、時間をくれませんか？」と聞いた。瑠夏は、「18時からバイトあるんですけどすみません！」と答えた。祐介は、「その喫茶店で浜口さんの事じゃなくて本場の理由を聞きたい」と言った。瑠夏は、「どういったことで！ 警察を呼びますよ！」と言った。祐介は、「昨日の夕方、誰かといましたね！ 証拠写真を持ってるので警察をよんだら暴露するよ！」と言った。瑠夏は、「わかったよ！ わかった！ じゃあっ！ 喫茶店で話す」と言った。祐介と瑠夏はさくらんぼという名の喫茶店へ歩いて、さくらんぼに入ってテーブルに向かい合うようにして座った。メイドは祐介と瑠夏に、「いらっしやいませ！ こちら今日のメニューです。決まったら、お呼びください」と言ってメニューをテーブルの上に置いた。祐介は瑠夏に、「ソフトドリンクはおごるからなにか頼んでもいいよ！ その代わり正直に話してくれ！」と言った。瑠夏は、「じゃあ！ クリームメロンソーダ！」と言った。祐介は、「OK！」と言った。祐介はメイドに、「すみません」と呼んでメイドがきたら、「アイスレモンティーとクリームメロンソーダをお願いします！」と言った。メイドは、「かしこまりました」と言った。瑠夏は祐介に、「昨日は学校が終わってからずっと私の跡を追っていたんですか？」と聞いた。祐介は、「はい！ 浜口さんから依頼を受けて大和田さん行動を調査していた」と答えた。しばらくしてメイドはアイスレモンティーとクリームメロンソーダを祐介と瑠夏がいるテーブルに配ったら離れた。祐介は瑠夏に、「アイスが溶けないうちに飲んで」と言った。瑠夏は、「どうも」と言った。祐介は、「浜口さんは魚べえでドリンク注文して持ってくる話しかけたのは1年前と聞いてた。それに週二で欠かさず魚べえにいくのに1年の間で5回しか見かけたことないというか見かけたことがないといっていた。浜口さん毎週火曜日にギター教室が終わった後で魚べえでにぎり寿司を食べることを愉しみにしていたことプラス大和田さんに会えるかもしれないと期待していた。大和田さんがいたらまた話しかけるつもりでいたらしい」と言った。瑠夏は、「私はすごい歳の離れた人から店と関係がない事で話しかけられて困っていたところでした」と言った。祐介は、「それは嘘です。この写真を見てください。なんで相談した店長と二人で六本木ヒルズに」と言った。瑠夏は、「店長がお店でいやな思いをさせたお詫びに自分の欲しい服でも買ってやろうか！」と言った。祐介は、「いやっ！ 違う！ シングルマザーで貧しい家計だからパパ活をしていたとか？」と聞いた。瑠夏は、「それはないですよ！ 私はパパを早くから亡くして、パパ代わりになる人が欲しかった」と答えた。祐介は、「店長はパパ活を援交と間違われると気まずいから警察の目をくらませるために誰かを犠牲にしようとしてちよっといひところにいる浜口さんを探索願いに出したのでは」と言った。瑠夏は、「違いますよ！ 警察の目をくらますなんて反対に怪しまれるでしょう！ 確かに私は店長に、『客となにを話してたのか？』と問われて、『すごい歳の離れた人から話しかけられて大変でした』と応えた。私は別にそこまで迷惑じゃなかったけど店長に『通報しなさい！』と言われたから」と言った。祐介は、「それも嘘

です。パパ活は犯罪にならないために警察の目をくرامせてもしょうがない。でも援交だったら未成年に手を出したとして犯罪になるから警察の目をくرامせるために悪事を隠すだろう」と言った。瑠夏は、「店長とはそんな関係などありません!」と言った。祐介は、「たぶん店長は浜口さんに嫉妬心を抱いて起きた」と言った。瑠夏は、「私を詮索しないで! 私は店長のことパパとしか思っていないよ」と言った。祐介は、「じゃあ! 店長にこの写真を見せていい?」と聞いた。瑠夏は、「なんにもないんです! シングルマザーで家が貧しくて大学進学を悩んで奨学金の学生ローンを考えいたときに週一でにぎり寿司を食べにこれるほど裕福なのは羨ましかった!」と言った。祐介は、「そうなのか! 早くアイスを食べべないと溶けちゃうぞ!」と言った。瑠夏は、「あっ!」と言ってクリームメロンソーダのアイスを食べたらメロンソーダをストローで飲んだ。祐介は、「さくらんぼいらなの! 貰っていい?」と聞いた。瑠夏は、「いいですよ! どうぞ!」と答えた。祐介は、「じゃあ!」と言ってクリームメロンソーダと一緒に添えてたさくらんぼを取って食べたならアイスレモンティーをストローで飲んだ。祐介は、「協力ありがとうございます!」と言って瑠夏と一緒にテーブルを離れたらレジで会計を済まして喫茶店から外に出た。瑠夏は、「私はこれで失礼します」と言って離れた。祐介は大江戸線の赤羽橋駅から大門駅で降りて都営三田線に乗り換えて大門駅から三田駅に降りて芝浦探偵社に戻った。祐介は魚べえの閉店21時から張り込み魚べえの向かい側にあるビル2階のファミレスの窓から様子を伺うことにした。祐介はドリンクバーを頼んでホットココアを飲みながら様子を見て1時間ぐらいいお店から店長が出てきた。祐介は急いでファミレスから外に出てレジで精算を済まして階段を下りて、魚べえの近くにある駐車場へ歩いて行く店長に問いかけた。祐介は店長に、「すいません! 私は芝浦探偵社の竹本と申します。魚べえの客としてきていた浜口亮一という者が女子高生のアルバイト員にちょっかいを出して不快な思いをしたことで警察に通報して捜査願いを出されていつもと変わらずにぎり寿司を食べにきた浜口さんが補導された件で浜口さんから依頼を受けました。それについて尋ねたいことがあります。時間とかいいですか?」と聞いた。店長は、「あ! 少しだけなら」と答えた。祐介は、「ファミレスで話ませんか?」と聞いた。店長は、「あんまり長い時間は困ります」と答えた。祐介と店長はファミレスに入ってファミレス店員に案内されてテーブルに向かい合いで座った。祐介はファミレス店員に、「ドリンクバー二つお願いします!」と言った。ファミレス店員は、「注文はタブレットからお願います! 祐介は、「あっ! そうだった!」と言った。祐介は店長に、「すいません! 名前はなんといえますか?」と聞いた。店長は、「田淵昌治(たぶちまさはる)と申します」と答えた。祐介は、「ドリンクながいいですか?」と答えてきますよ!」と聞いた。田淵店長は、「エスプレッソのホットで砂糖ミルクはいりませんよ!」と答えた。祐介はドリンクコーナーでエスプレッソのホットと自分のホットココアを自販機で注いでマグカップを両手に持ってテーブルに持ってきた。祐介は、「冷めないうちにどうぞ!」と言った。田淵店長は、「どうも!」と言った。祐介は、「なんで浜口さんを警察に捜索願いを出しましたか?」と聞いた。田淵店長は、「大和田さんがすごい歳の離れた人から話しかけられて困っていたからですよ!」と答えた。祐介は、「本当ですか! 昨日の夕方頃に大和田さんと六本木ヒルズで一緒にいるところを見ました」と言っ

てテーブルに写真を何枚か並べて見せた。田淵店長は、「尾行していたんですか?」と聞いた。祐介は、「そうです!」と答えた。田淵店長は、「私は昨日初めて大和田さんと六本木ヒルズに行きました。私が大和田さんと約束してしまったのでね!」と言った。祐介は、「約束?」と聞いた。田淵店長は、「はい!」

と答えた。祐介は、「どんな約束ですか?」と言った。田淵店長は、「私は、『バイトを辞めます』と言ってきた大和田さんに、『明日の休みいやな思いをさせたから食事おごる』と言って約束しました。でも大和田さんが、『食事をおごってもらうよりも洋服を買ってほしい』と言って買わされました」と答えた。祐介は、「それでしたか! 誤解が解けました。店長をやっているくらいなら妻子いるでしょうからパパ活なんてできない。ましてや援交なんて性犯罪して捕まるわけにいかないでしょうからね」と言った。田淵店長は、「そうですね! 私には妻も子供もいますし援交なんてとんでもない!」と言った。祐介は、「警察の目をくرامせるために浜口さん利用したのかと疑いました。すいません! 調査の協力をありがとうございます」と言っただ。田淵店長は、「いいえ」と言ってエスプレッソを飲んだ。祐介は、「最後に失礼ですが、歳はいくつですか?」と聞いた。田淵店長は、「46歳です」と答えた。祐介は、「そうですね! ファミレスから出ましょう」と言ってココアを飲んでレジで精算を済ましてから田淵さんとファミレスを出た。祐介は田淵店長が黒いセダンの車に乗って移動するまで見送って三田駅まで歩いて三田駅から地下鉄に乗って人形町で東京メトロ日比谷線に乗り換えて北千住駅から綾瀬駅に着いた。祐介は駅から歩いたところでコンビニによって弁当とドリンクを買ってコンビニから出てぼろアパートに着いた。祐介は弁当を食べてドリンクを飲んでゴミの分別をして片してお風呂に入って歯を磨いてテレビを見ながらベッドでゆっくりとシティあたら、そのまま眠っていた。翌朝に起きた祐介は、「今日は土日の休みだ!」と思って二度寝をして昼頃に目覚めた。祐介は大和田さんの家が近いので昼過ぎてから最後に勇気を出してたんぼぼ荘に行って大和田さんに、「なんで警察に捜索願いを出したのか?」と本当の真実を聞いてみようと思った。祐介はテレビを見てゆっくりした後で顔を洗って歯を磨いてカジジュアルスーツを着てボサボサ髪を隠すためにハンチング帽を被って家から出て、駅まで歩いたところにあるラーメン屋でたっぷり胡椒をふったチャーシュー味噌ラーメンを食べてよく冷えた水を飲んだ。祐介はラーメン屋から出て、綾瀬駅から地下鉄に乗って北千住駅で乗り換えて北千住駅から電車に乗って西新井駅に着いた。祐介は駅からたんぼぼ荘へ歩いて行って、たんぼぼ荘近くまで来て戸惑いながらたんぼぼ荘に行った。祐介は大和田さんの家のプッシュフォンを押して大和田さんが出て来るのを待っていたら、家のドアが開いて大和田さんのお母さんが現れた。祐介は大和田さんのお母さんに、「ごめんください!」と言った。大和田さんのお母さんは、「どちら様ですかね?」と聞いた。祐介は、「私は芝浦探偵社の竹本と申します! 夜分すいません! 以前に魚べえで娘さんに不快な思いをさせた浜口さんを店長が警察に捜索願いを出したことについて訪ねてきました」と答えた。大和田さんのお母さんは、「そのことについてなら帰ってください!」と言った。祐介は、「待ってください! 私は自分の自宅から近いところに住んでられたので訪ねてきました。私は浜口さん依頼を受けてきました。浜口さんは魚べえの出入り禁止となった本当の真実が知りたいんです」と言った。瑠夏はお母さんに、「ママ! 私この人に事情を教える」と言って奥から現れた。お母さんは、「なにいつてるの!」と言った。瑠夏は、「私はちょっと外に出てくるから」と言って祐介を連れてたんぼぼ荘から出ていった。瑠夏は祐介に、「この近くの公園にこう!」と言った。祐介は、「じゃあ!」と言って公園まで瑠夏についていった。公園に着いた祐介と瑠夏はブランコに座って話をした。祐介は瑠夏に、「さっき事情を教えるといってたよね! どういうこと?」と聞いた。瑠夏は、「私、ぶっちゃけた話になるんだけど、夏休み中に彼氏ができて、ある日に彼の部屋に遊びにいったときに彼が私を無理やりベッドに押し倒したら服を脱がそうとして抵抗したら

乱暴されて私の処女を奪われたんです」と言った。祐介は、「それは可哀想に！警察に捜索願いは出さなかったのか？」と聞いた。瑠夏は、「ママに知られたくなかったから！私の意志で彼氏の部屋にいったんで無理だったな！」と答えた。祐介は、「今もその彼氏は付き合っているの？」と聞いた。瑠夏は、「いいえ！夏休みが終わる前に別れた」と答えた。祐介は、「夏の恋は遊びで終わると言うからね！でも好きで付き合ってたんでしょ！」と言った。瑠夏は、「私はまだ付き合ってたばかりで彼のがよくわからなかったから身を許してなかった！」と言った。祐介は、「そうだったのか！それで浜口さんに当たつけるような真似をしたってことか！」と言った。瑠夏は、「そうです！すごい歳の離れた客に話しかけられて、近くを通るたびに一生懸命に見ることに困っていたら店長にいつつけてやろうと腹いせに思いついたことだった」と言った。祐介は、「問題は彼氏のことなのに浜口さんが警察に捜索願いをされたなんて違うでしょ！大和田さんから警察に事情を説明してもらってまた前のように浜口さんを魚べえの立ち入り禁止を解除してあげてほしい」と言った。瑠夏は、「それはできません！元彼に乱暴されたことは誰にもいえない」言った。祐介は、「そうか！今元彼は何歳でなにをやってる人？」と聞いた。瑠夏は、「私より一個上の19歳で今は高校を卒業してからフリーターをしている」と答えた。祐介は、「そうですか！今日はどうもありがとう！浜口さんにそのことは黙っておきます」と言った。瑠夏は、「元彼のことはいわないでください！」と言った。祐介は、「わかった！」と言った。瑠夏は、「わざわざ芝浦から調査にきたんですか？」と聞いた。祐介は、「今日は探偵社が土日の休みでたまたま自宅から近いところに住んでるから訪ねてきただけだよ！」と言った。祐介は瑠夏をたんぼぼ荘に送っていった。祐介は駅まで歩いて西新井駅から電車に乗って北千住駅で乗り換えて地下鉄に乗って綾瀬駅で降りて、そのままぼろアパートに向かった途中で、スーパーによって食べ物と飲み物を買って歩いてぼろアパートに着いて荷物を置いて上着を衣紋掛に掛けてソファに座り込んでリモコンでテレビを付けた。祐介は夕食を済ましたら入浴して歯を磨いて就寝して、一番過こして起床して日曜日をゆっくりと休んで過こした。翌朝起きた祐介は顔を洗ってクリームパンとヨーグルトを食べてオレンジジュースを飲んで歯を磨いて服に着替えて家から出て、綾瀬駅から地下鉄に乗って北千住駅で乗り換えて北千住駅から地下鉄に乗って三田駅で降りて駅から歩いて芝浦探偵社に出社した。祐介は午前中に浜口さんへ電話をして調査完了の知らせをしたら、「今日の17時頃にいきます」と言っていたからそれまで他の案件の書類整理を済まして待つことにした。祐介は浜口さんが17時頃に探偵社に訪れたら、テーブルに案内して向かい合いでイスに座った。祐介は亮一に、「あの案件ですが、大和田さんの行動を調査したところ古いアパートに住む母子家庭で貧困で都内の進学校に通うまじめな女子で友達よりもお母さんと一緒にいる時間を大切にしているようです。名前と住所と学校名は個人情報のために教えられません！」と言った。亮一は、「そうですか！大和田さんの私生活で変わったところなかったですか？」と聞いた。祐介は、「一度、大和田さんのバイトが休みのときになぜか魚べえの店長と一緒に六本木ヒルズにいったときがあって、そのことについて大和田さんは店長に、『さっき、あの客となにを話していたか？』と聞かれて、『すごい歳の離れた人に話しかけられて困ってました』と言ったら、店長が警察に通報したそうです。大和田さんは、『そこまで迷惑じゃなかった』と言ってました。それから店長が、『いやな思いさせたから食事おごるよ』と言ってきて、大和田さんは早くからお父さんが過労死で亡くなっていたからファザコンもあって遠慮なく六本木ヒルズにいった、『食事よりも洋服を買ってほしい』とおねだりしたら幸いです。親思いな大

和田さんは家計を支えるためにバイト代だけでは携帯代と小遣いの給料しか入らないから洋服にしたと思います。これが、その時に撮った写真です！ 店長は大和田さんを特別に娘のように可愛がっていたために歳の離れた人から声をかけられたと聞いて嫉妬をして通報したかもしれませんね！ あんまり貢献できないまま力になりませんが、もう大和田さんの行動調査を終わります」と言った。亮一は、「少し納得いかないところありますけど、わかりました」と言った。祐介は、「ありがとうございます！ 喫茶店でマスクを外したときの瑠夏さんの素顔を見たのですが、あんまり可愛くなかったです。やっぱりマスク美人じゃないですか」と言った。亮一は、「そうですね！ 本当は大和田さんに優しくされたので優しさを求めたのかも知れない！」と言った。祐介は、「浜口さんは固定概念が強い人ですから大丈夫です。いつかわかってくれる女（ひと）が現れますよ！」と言った。亮一は、「そうですね！」と言った。そして、祐介は浜口さんから報酬を貰った。

妄想の悲劇

祐介は芝浦探偵社に後から入社してきたのに、連続殺人事件の真犯人を探り出したり優秀な成績を持っているライバルで同僚の西山孝治（にしまたかはる）と荒井修造（あらいしゅうぞう）のコンビにさき起こされてしまったぶんを取り戻さなければならぬと思いつながら安井と一緒に就業していく上で迂闊の上らない日々を過ごしていたが、転機が訪れようとしていた。祐介と智宏は西山と荒井たちを下すには危険に立ち向かう命懸けの任務が待ち望んでるかもしれないし人の裏側を探る真似をすればなにが潜んでるかわからないと思った。祐介は芝浦探偵社にまた新しい案件で池田幸助（いけだこうすけ）という青年が依頼に来た。幸助は祐介に、「俺、実は俳優やってましてドラマ出演がきっかけでグラビアアイドルの子と仲良くなってから世間に内緒で付き合ってます。そのグラドルの子は、どうもSNSで噂を立てられて上映を前にした短編映画のプロデューサーの西村敬一（にしむらけいち）と間で枕営業の疑惑が発覚したんです。彼女は精神的に追い詰められているし韓国女優やアーティストがよくSNSでデマの誹謗中傷に追い詰められて自殺することがありますが、彼女にそんなことになってほしくない！ 真実を突き止めてもらえないでしょうか？」と聞いた。祐介は、「でもすごいですね！ そんな有名人が目の前にいるなんて」と答えた。幸助は、「驚かないでくださいよ！ 普通の人です」と言った。祐介は、「それでグラビアの子の彼女の名前はなんといいますか？」と聞いた。

幸助は、「川島みゆきですよ！」と答えた。祐介は、「もしかしてあのグラビアクインの？」と言った。幸助は、「いえ違います！ 週刊プレイバックで俺たちの交際が発覚してスクープされたばかりですよ！」と言った。祐介は、「それなら世間は西村プロデューサーと枕営業の疑惑より池田さんとの交際発覚のほ

うが著(いちじる)しいかと思えます」と言った。幸助は、「あんな噂をSNSに投稿されたら、俺の立場も面子もないし彼女の立場のないし見えない陰謀に立ち向かって彼女が西村プロデューサーと枕営業などをしていないこと突き止めてもらいたいです」と言った。祐介は、「わかりました。川島さんとは頻繁に会ったりしてるんですか?」と聞いた。幸助は、「向こうが忙しいときには3週間に一度ぐらいで会ったりしてメールもするけど、たまに返信が3日かかる時があります」と答えた。祐介は、「でも我々が彼女の個人情報なんかを知ってしまっていますか?」と聞いた。幸助は、「いいです。調査をお願いするので」と答えた。祐介は、「じゃあ! 川島さんの行動調査をしてSNSの噂がデマか真実を追ってみます」と言った。幸助は、「芸能界の天敵のマスコミに口外しないでください」と言った。祐介は、「はい! あとで契約書にサインをお願いします」と言った。幸助は、「少し安心した!」言った。祐介は、「早速ですが、ここに川島さんと住所と所属事務所の住所を書いてください」と言って書類を渡した。幸助は、「はい!」と言って書類に記入した。祐介は、「契約書にもサインをお願いします」と言って契約書を渡した。幸助は、「どうも!」と言って契約書にサインした。祐介は、「じゃあ! 調査開始します」と言って書類と契約書を受け取った。

幸助は、「お願いします」と言って探偵社から外に出た。祐介は今日も夜になってきたので書類を片して21時で芝浦探偵社を出社した。祐介はぶろアパートでコンビニで買ったカツ丼をレンジで温めて食べて温かいお茶を飲んだ。祐介はノート型パソコンで川島みゆきの情報を調べてみた。祐介は、「生年月日は2002年の6月10日生まれで23歳でAB型なら双子座の二重人格とAB型の二重人格で四重人格かな! 本名は河島優子なら優子という名前は優しい子だけに裏腹で腹黒な悪女が多いかもしれないと聞いたことがある。生まれも育ちも秋田県むつ市のようだ! 秋田美人かな! 東北弁の訛(なま)りは標準語に直してるだろう! それはグラビアと女優をやってるなら当然だ!」と呟いた。祐介は港区六本木ヒルズマンションに住む川島みゆきのプライベートを行動調査するのに張り込みをして毎日のように夜遅くなると思った。祐介は明日からしばらくの間六本木にあるマンガ喫茶で寝泊まりの生活となるので今日の夜は穏やかにのんびりと過ごそうと思ってコンビニで酒とつまみを買出しに行っておいた。祐介はゴミを分別してお風呂に入って歯を磨いてテレビを見ながらほろよいのカシスオレンジを呑んでポテトチップスのコンソメ味を食べてベッドに横たわって知らぬまに眠っていた。翌朝起きた祐介は、顔を洗って好きなジャムパンを食べて牛乳を飲んで歯を磨いて服に着替えて家から出て駅まで歩いて綾瀬駅から地下鉄に乗って北千住駅で乗り換えて人形町駅から地下鉄に乗って三田駅に降りて駅から歩いて芝浦探偵社に出社して川島さんの所属する松田プロの芸能プロダクションに行つてマネージャーからスケジュールを聞き込む調査に向かった。祐介は智宏の運転

で車に乗って港区にある松田プロに着いて車から降りて智宏が車をビルの脇に停めて待機した。祐介は松田プロのビルに入って受付で川島さんの担当するマネージャーを呼び出せないか頼んだ。祐介は受付の女性に、「すみません! 私は芝浦探偵社の竹本と申します」と言って名刺を渡した。受付の女性は、「なんの用ですかね?」と聞いた。祐介は、「川島みゆきさんのマネージャーと直接会って話したいことあって参りました」と答えた。受付の女性は、「マネージャーにですか?」と聞いた。祐介は、「そうです! 私は川島みゆきさんと関係してる者から依頼調査を受けて訪ねてきました」と答えた。受付の女性は、「今日の朝から川島みゆきのグラビア撮影で赤坂のスタジオに行つていて、ここにはおりませんが!」と言っ

た。祐介は、「朝から早いですね！ どのスタジオですか？」と聞いた。受付の女性は、「ケイズスタジオです。関係者以外の方は立ち入り禁止ですよ」と答えた。祐介は、「そうですかあ！ 何時ぐらいで撮影が終わるんですか？」と答えた。受付の女性は、「わかりません！ 撮影終了時間11時になっております」と答えた。祐介は、「今日はグラビア撮影だけであとは？」と聞いた。受付の女性は、「川島みゆきのことはマネージャーがすべて管理してるのでわかりません！」と答えた。祐介は、「マネージャーは川島みゆきさんを車でケイズスタジオに乗せて行っただけですか？」と聞いた。受付の女性は、「はい！」と答えた。祐介は、「事務所の車はどんな車ですか？」と聞いた。受付の女性は、「紺色の小型車です！」と答えた。祐介は、「ナンバープレートの番号は？」と聞いた。受付の女性は、「ちょっとお待ちください！ 品川302の5375です！」と答えた。祐介は、「ありがとうございます！ 最後にマネージャーの名前は？」と聞いた。受付の女性は、「佐藤恵子(さとうけいこ)で女のマネージャーです！」と答えた。祐介は、「協力ありがとうございます。失礼します！」と言って松田プロから外に出た。祐介はビルの脇に停めてある車に乗ってケイズスタジオへ向かった。ケイズスタジオに着いた祐介と智宏は、関係者以外の立ち入り禁止のためにスタジオ正門近くに車を停めて、マネージャーが乗る紺色の小型車が駐車場から出てくるまで張り込んで待った。祐介と智宏は雑談をしながら車のシートを倒して待つこと2時間ぐらいで紺色の小型車が駐車場から出てきて正門を出たときに咄嗟に車を発車させて紺色の小型車を追っていた。祐介はナンバープレートは品川302の5375の紺色の小型車を追跡していった途中で紺色の小型車がファミレスの駐車場に入っていた。祐介と智宏は続いてファミレスに入って車を停めたら紺色の小型車から川島みゆきと佐藤マネージャーが車から降りてファミレスに入った。祐介は店員に案内されて窓のあるテールブルに向かい合いで座ってる川島みゆきと佐藤マネージャーを見て店員に少し離れたテールブルに案内されて窓のあるテールブルに向かい合いで座った。ファミレスの店員は祐介と智宏に、「いらっしゃいませ！ お冷はセルフサービスでドリンクコーナーにあります」と言った。祐介と智宏は、「どうも！」と言ってタブレットでドリンクバーを頼んでドリンクをグラスに入れてテールブルに持ってきた。祐介は川島みゆきがお手洗いで席を外すときを狙って川島みゆきと佐藤マネージャーの様子を伺っていた。川島みゆきと佐藤マネージャーはタブレットで注文を終わらした後で佐藤マネージャーのほうが席を外してお手洗いにいった。祐介は席を外してお手洗いの近くで予定を変更して佐藤マネージャーがお手洗いで席を外した。しばらくして祐介はお手洗いで出てきた佐藤マネージャーにいきなり問いかけた。祐介は佐藤マネージャーに、「突然すみません！ 私は芝浦探偵社の竹本と申します」と言って名刺を渡した。佐藤マネージャーは、「なんですか？」と聞いた。祐介は、「グラドルの川島みゆきのSNS投稿のデマについて聞きたいことがあるんです」と答えた。佐藤マネージャーは、「それについては本人から聞かないとわからない」と言った。祐介は、「川島さんのマネージャーですね！」と言った。佐藤マネージャーは、「そうです」と言った。祐介は、「本当は川島みゆきさんのスケジュールが知りたい？」と聞いた。佐藤マネージャーは、「それは教えません！」と答えた。絶対に漏洩(ろうえい)しません！ 川島みゆきの関係者から依頼を受けてきました。個人情報を守ります」と言った。佐藤マネージャーは、「今から他のスタジオに入ってグラビア撮影があります。明日から川島みゆきはグラビアのDVD撮影で海外ロケに入ります」と言った。祐介は、「海外ロケはどこですか？」と聞いた。佐藤マネージャーは、「グアムで

す！」と答えた。祐介は、「グアムはいつまでいますか？」と聞いた。佐藤マネージャーは、「金曜日の朝に戻ってきます」と答えた。祐介は、「川島みゆきの今後の活動はたくさんありますか？」と聞いた。佐藤マネージャーは、「川島みゆきのYouTubeチャンネルの投稿のために撮影編集してるらしいですよ」と答えた。祐介は、「ドラマ撮影とかはないですか？」と聞いた。佐藤マネージャーは、「今は入ってないですね！　またグラビア撮影が入ってきてます」と答えた。祐介は、「わかりました。どうも！　ありがとうございます」と言っています」と言って佐藤マネージャーから離れた。奥手で消極的な智宏は、思わせぶりな金づる女の川島みゆきに問いかけた。智宏はみゆきに、「あのっ！　すいません！　グラドルの川島みゆきさんですか？」と聞いた。みゆきは、「いえ！　違います」と答えた。智宏は、「そうですか！」と言った。みゆきは、「よく似ているといわれます」と言った。智宏は、「私は芝浦探偵社の安井と申します。あなたとある関係者から依頼を受けて参りました。SNS投稿でデマが流れたことで心配されてるんです」と言った。みゆきは、「そいつは誰ですか？」と聞いた。智宏は、「さあ！　あなたのSNS投稿でプロデューサーと枕営業のデマの嫌がらせに精神が病んでるってました」と答えた。みゆきは、「男はみんな単純バカ！　男は顔じゃないとかいえばみんな信じる。どうせそいつは被害妄想をされてるだろう！」と言った。もうあなたが川島みゆきであることはわかったから、あなたの秘密は守りますから本当のことをいってほしい！」と言った。みゆきは、「私はプロデューサーと枕営業をしてないし肉体関係も結んでない！　あんまりひっこいと警察を呼びますよ！」と言った。智宏は、「わかりました。だけど警察を呼んだら身分がバレますよ！」と言って川島みゆきから離れた。テーブル席に戻った智宏は、しばらくしてテーブル席に祐介も戻った。祐介は智宏に、「ファミレスを出よう！」と言ってグラスに残ったドリンクをそのままにしてレジで精算を済まして、智宏と一緒にファミレスから出て駐車場に停めていた車に乗って移動した。車を運転する祐介は智宏に、「やっぱり佐藤マネージャーは川島みゆきのスケジュールを細かく教えてくれなかった！　これじゃあ！　不定休で時間がわからない」と言った。智宏は、「だと思っただけを外している間に川島みゆきのいるテーブルを訪ねて聞いてみた」と言った。祐介は、「なんだって！　それはまずいことした。どんなことを聞いた？」と聞いた。「あなたとある関係者から依頼を受けて参りました。SNS投稿でプロデューサーと枕営業のデマの嫌がらせで心が病んでるといっていた」と答えた。祐介は、「追い詰めてしまったか！　マスコミを警戒してる最中に俺たち探偵まで警戒されるのは間違いない！　しばらく張り込みはやめよう」と言った。智宏は、「スケジュールがわからないからそうするしな手段がなかった！　枕営業もしてないし肉体関係も結んでないといっていたよ！　しまいには警察を呼ぶまでいわれたんだ！」と言った。祐介は、「川島みゆきを怒らせてしまったか？」と聞いた。智宏は、「いや！　怒ってない！　ただ一生懸命に否定していたよ！」と言った。祐介は、「いづれにせよ！　俺たちが調査していることを知られてしまった」と言った。智宏は、「どうせ！　佐藤マネージャーも川島みゆきも警戒してる」と言った。祐介は、「川島みゆきは明日からグアムに海外ロケでグラビア撮影に行くそうだし！　当分この案件に関しては保留にしようぜ！」と言って芝浦探偵社へ向かった。佐藤マネージャーはみゆきに、「遅くなってごめん！」と言ってテーブルに戻った。みゆきは、「へボな探偵にあなたとある関係者の依頼で参りました。SNS投稿のデマの嫌がらせの件に追い詰められて心が病んでるといってましたよ」と言った。佐藤マネージャーは、「こっちもさっき探偵に似たようなことを問われてみゆきの今後の活動のスケジュールを知りたいと聞いてきた」と言った。芝浦探偵社に着

いた祐介と智宏は車から降りて芝浦探偵社に戻って次の提案を考えた。祐介は智宏に、「川島みゆきが枕営業をしていたと噂されるプロデューサーを探し出して聞き込み調査するしか手がないな!」と言った。智宏は、「そうするしかない! そのプロデューサーを調べよう!」と言ってパソコンで検索をした。祐介は、「よろしく!」と言った。智宏は、「西村啓一(にしむらけいいち)プロデューサーは41歳で主に短編映画の監督をする喫茶店のオーナーでもあって事務所が喫茶店の2階にあるみたいだ!」と言った。祐介は、「他にもなにかある?」と聞いた。SNSのコメントには西村プロデューサーがまだ売れないグラビア女優たちに、『仕事を与える』と言って誑(たぶら)して枕営業せざるお得不いラビア女優もいたしい」とら答えた。祐介は、「川島みゆきはグラドルで売れない頃に西村プロデューサーと出会って、誑かされた可能性がある。その喫茶店に当たってみるしかないな!」言った。智宏は、「そうだね!」と言った。祐介は、「なんていう喫茶店だっけ?」と聞いた。智宏は、「カップカフェだそうな!」と答えた。祐介は、「そこはどこにある?」と聞いた。智宏は、「麻布十番だ!」答えた。祐介は、「わかった」と言って智宏と一緒に芝浦探偵社から出て車に乗って麻布十番にあるカップカフェへ向かった。カップカフェに着いた祐介と智宏は、近くのコインパーキングに車を停めて車を停めて車から降りて歩いてカップカフェに入って店員からテーブルに案内されてイスに座った。祐介は智宏に、「いらっしやいませ! ドリンクの注文ございましたらどうぞ!」と言った。祐介は、「食べ物とがありますか?」と聞いた。店員は、「あのっ! ドリンクしか提供してないですけどいいですか!」と答えた。祐介は、「アイスレモンティーください!」と言った。智宏は、「自分はアイスコーヒーでお願いします」と言った。店員は、「かしこまりました!」と言って離れた。店員は、「アイスレモンティーとアイスコーヒーです」と言ってテーブルに持ってきた。智宏は、「この喫茶店は映画関係者意外こないですか?」と聞いた。店員は、「いいえ! ほとんどが撮影スタッフか出演者ですが、普通のお客さんもきますよ!」と答えた。智宏は、「あの! ここに西村プロデューサーはいませんか?」と聞いた。店員は、「3階の部屋に住んでますが、今はいないかもしれませんね!」と答えた。店員は3階の部屋からテーブルに西村プロデューサーを呼んできた。テーブルにきた西村プロデューサーは祐介と智宏に、「自分がプロデューサーの西村です。なにか用ですか?」と聞いた。祐介は、「芝浦探偵社の竹本です。SNS投稿であなたとグラドルの川島みゆきが枕営業していたと噂されたことで川島みゆきの関係者から依頼を受けてきました」と答えた。西村プロデューサーは、「自分はしてません! 売れないグラビア女優に、『仕事を与える』と言って誑かせて枕営業させてない! SNS投稿で世間に叩かれてるが、あれはでっちあげのデマなんだ!」と言った。祐介は、「そうですね!」と言った。西村プロデューサーは、「それだけですか」と言って離れた。祐介は智宏はドリンクを残さずに飲んでレジで会計を済まして、カップカフェから出た。祐介と智宏は、コインパーキングの精算機で料金を払って乗車して走らした。祐介は智宏に、「川島みゆきは西村プロデューサーとは枕営業をしてないと思う」と言った。智宏は、「そのようだ! 川島みゆきがグアムから戻ってくるまで浮気調査もできない! この案件は保留だ!」と言った。芝浦探偵社に着いた祐介と智宏は、車から降りて他の案件を見た。智宏は祐介に、「川島みゆきはグラドルだけで稼いで暮らしてるのになんで六本木ヒルズマンションなんかに住んでるんだろう」と言った。祐介は、「六本木ヒルズマンションの家賃は100万ぐらいと聞いたことがあった」と言った。智宏は、「なにか裏稼業がありそうだ」と言った。智宏は、「そうですね!」と言った。同僚の孝治と修造が何か言いたげな顔をして反対の席からやってきたら、お

ちよくり始めた。孝治は、「いつも女のケツばかり追ってはつきりとした答えも出せず探偵として失格ですわね！」と言った。祐介は、「まだ調査は続くんだ！ どんな転回が待ってるかはわからない」と言った。修造は祐介と智宏に、「俺たちよりも先に入ってきたのにまだそんなところなのか！」と言った。祐介は、「探偵業は先輩も後輩もない。実力社会だ！ 俺たちはどうせいつか勝ってるからな！」と言った。智宏は、「おまえら25歳ぐらいだっけ！ 俺たちよりも10歳年下であっても実力でものを言わせようとしても社会経験のある俺たちには敵わない！」と言った。祐介と智宏は心がたじたじになって孝治と修造は何も言わず無言状態になって離れた。智宏は祐介に、「あいつらいったいななんだ！」と言った。祐介は、「相手にするなよ！」と言っていていきなり電話が鳴り始めたので受けた。智宏は、「そうだな！」と言った。決着の金曜日にて、祐介はいつもと変わらずに芝浦探偵社に本社して、「今日は川島みゆきがグアムから帰ってくる日だ！」と思つて智宏と一緒に芝浦探偵社から出て車に乗って六本木ヒルズマンションに向かった。六本木ヒルズマンションにたどり着いた祐介と智宏は六本木ヒルズの地下にある駐車場に車を停めて駐車場を出て、六本木ヒルズマンションまで歩いてきて、六本木ヒルズマンション近くで張り込んだ。祐介と智宏は1時間ぐらいして、黒いサンングラスをかけた川島みゆきらしき女性が六本木ヒルズマンションに入っていく姿を見てまた外に出てくるまでに時間がかかるだろうと思つて、夜まで1時間交代で回して休憩をとって張り込むことにした。祐介は休憩の時に六本木ヒルズをぶろついてたら、「祐介！ 川島みゆきが動いた。僕は川島みゆきの跡を追つてく」と言った。祐介は、「見失わないようにな！」と言った。祐介は地下の駐車場から車を走らして地下の駐車場から出た。祐介は、「智宏！ 今どこにいる？」と聞いた。智宏は、「六本木通りの六本木2丁目通り辺を歩いている」と答えた。祐介は、「わかった！ すぐに行く！」と言った。祐介は六本木2丁目交差点付近にきて、「どこを歩いている？」と聞いた。智宏は、「六本木1丁目で右折したところのコンビニにいる」と答えた。祐介は、「わかった！」と言った。智宏は、「川島みゆきはコンビニ出たら、そのまま南北線の六本木1丁目駅から地下鉄に乗っていくかもしれない！」と言った。祐介は、「そこにあと3分でいける」と言った。智宏は、「僕はコンビニ前で待っている」と言った。祐介は六本木1丁目のコンビニに着いて、「コンビニに着いた」と言った。智宏は、「まだ川島みゆきはコンビニから出てこないで！」と言った。祐介は、「川島みゆきはスマートフォンで電話してる」と言った。智宏は、「誰かと待ち合わせするようだ！」と言った。祐介の乗る車の目の前に止まった白いワゴン車にコンビニから出てきた川島みゆきが乗った。智宏はすぐにスマホで電話を切つて、祐介の運転する車に乗って祐介が白いワゴン車を追つていった。祐介と智宏は車で追つた白いワゴン車から出てくるまで待つてみた。川島みゆきと謎の中年男が車から降りてきて、どこかへ歩いて行つたところで智宏だけが車から降りて川島みゆきと謎の中年男を尾行した。智宏は川島みゆきと謎の中年男が赤坂のラブホテルに入っていくところをカメラで写真を撮つて捉えた。祐介はしばらくして車に戻ってきた智宏と一緒に芝浦探偵社に向かった。智宏は、「川島みゆきと謎の中年男がラブホに入るところをバッチリ撮れた」と言った。祐介は、「それは決定的な瞬間を捉えたな！ しかし、あの中年男はいったい誰なんだろう」と言った。智宏は、「どこかのプロデューサーかもしれないですね」と言った。祐介は、「このことは絶対にマスコミに知られてはならない」と言った。智宏は、「わかった！」と言った。芝浦探偵社に着いた祐介と智宏は車から降りて芝浦探偵社に戻って書類整理などをした。祐介は

幸助に電話して調査完了を通知したら、幸助は、「そうですね！ 来週の月曜日にそちらに向かいます。19時頃になるから明日ならいつでも空いてるけど休みですよ！」と言った。祐介は、「そうですね、どこかで会って話すこともできますよ」と言った。幸助は、「秋葉原で会いませんか？」と聞いた。祐介は、「近いから助かります」と答えた。幸助は、「じゃあ！ 秋葉原駅に15時に待ち合わせしますか？」と聞いた。祐介は、「わかりました。失礼します」と答えた。幸助は、「はい！」と言って電話を切った。祐介は21時で芝浦探偵社を閉めて帰宅してコンビニの弁当を食べてドリンクを飲んでゴミを分別して片して歯を磨いてお風呂に入ってベッドに横たわって眠った。翌朝に起きた祐介は顔を洗ってあんぱんを食べてむぎ茶を飲んで歯を磨いて服に着替えて家から出て綾瀬駅から地下鉄に乗って北千住駅に降りて北千住駅から地下鉄に乗って秋葉原駅に待ち合わせ時刻の10分前に着いて電気街口改札を出たところで待った。5分遅れてきた幸助は祐介に、「遅れてすいません！ 電車一本乗り損ねて！」と言った。祐介は、「全然大丈夫です！ あとで私は携帯番号を教えときます！」と言った。幸助は、「はい！」と言った。祐介は、「なんで秋葉原なんですか？」と聞いた。幸助は、「僕の住んでるところが中野だから中野駅で総武線の電車に乗って秋葉原駅にくるのが一番近い都市なんでよく遊びにくるんです」と答えた。祐介は、「近くのスタバでいいですか？」と聞いた。幸助は、「いいですよ」と答えた。祐介は幸助と一緒に駅の周辺にあるスタバに入って店員にテーブルを案内されて向かい合いで座った。祐介は幸助に、「川島みゆきの浮気調査をしました。SNSの投稿で起きた噂は本当でした。西村プロデューサーではありませんでした」と言った。幸助は、「誰ですか？」と聞いた。祐介は、「それは誰かわかりません！」と答えた。幸助は、「じゃあ！ 意味がないですね！」と言った。祐介は、「川島みゆきさんが、この男と一緒にラブホに入るところを目撃しました」と言って何枚か写真を見した。幸助は、「あっ！ この人は松田プロの室井プロデューサーじゃありませんか？」と言った。祐介は、「知ってるんですか？」と聞いた。幸助は、「ドラマ撮影の時にスタジオにきていた」と答えた。祐介は、「松田プロといえば川島みゆきの所属してるところですね！ 調べてよう」と言ってスマホでググってみた。幸助は、「お願いします」と言った。祐介は、「名前は室井章太郎（むろいしょうたろう）で40歳の方ですね！ 最近グラドルと枕営業の噂があるようです」と言った。幸助は、「まさか！ それはあり得ないよ！ いつか彼女から本心を聞いてみたいと思う。たぶん別れ話になるだろう！ 女優は男みたいに裸一貫でやるようなところがあると思うと怖いよ」と言った。祐介は、「まあ！ 悪いように考えず前向きにいきましょう！ やっぱりネガティブよりポジティブですよ！」言った。幸助は、「でもショックだ！ 彼女のことが下品で不潔に見えてきた」と言った。祐介は、「今の時間はチケット取れるかわからない。地上アイドルじゃなく地下アイドルならチケット取れるでしょう」と言った。祐介は、「コンセプトカフェにしましょう！」と言った。幸助は、「メイドカフェとガールズバーを一緒にしたようなコンカフェね！」と言った。祐介と幸助はコンカフェを探しに向かった途中でピラ配りのメイドさんに出会ってお店に案内してもらった。コンカフェに入った祐介と幸助はメイドさんにテーブルを案内されて並んでイスに座った。祐介は黒葡萄というお店で仮面舞踏会の怪盗ルビンの衣装を着たメイドさんが来た。メイドさんは祐介と幸助に、「おかえりさい！ ご主人様！」と言った。祐介は、「大和田さんですか？」と聞いた。メイドさんは、「ココアです」と答えた。祐介は、「魚べえのバイトは？」と聞いた。メイドさんは、「やめましたよ」と答えた。祐介は、「源氏

名か！ 萌え萌えキュンオムレツとおいしくなれホットココアください」と言った。メイドさんは、「はい！」と言った。幸助は、「自分は手作りミートパスタとラブ注入メロンソーダとクマさんパフェくださいと言った。メイドさんは、「かしこまりました」と言って離れた。幸助は祐介に、「知り合いなんですか？」と聞いた。祐介は、「ちょっと！ 前の案件のときに色々あって！」と答えた。幸助は、「どんな年代でも共通する話題は酒か女しかない」と言った。祐介は、「この後で居酒屋に行きますか？」と聞いた。幸助は、「いいですね！ でもまた今度にしましょう！」と答えた。しばらくしてメイドさんがテーブルに食べ物と飲み物を持ってきた。祐介と幸助は食べ物と食べて飲み物を飲んでレジ会計を済ましてコンカフェを出た。その後、幸助は川島みゆきとデート中に室井プロデューサーの枕営業疑惑を追求して喧嘩別れた。川島みゆきは枕営業の裏稼業を退めて青山のマンションに引っ越した。幸助は川島みゆきが薔薇(いばら)道の芸能界で売れようとしたかただ単に金ずるの室井プロデューサーに暴力で無理矢理やられた可能性もあって示談金を取ろうとしていたかもしれない。

平成の女たち

ある日の夕方頃に芝浦探偵社に電話が入った。謎の男は、「萩原です。知らない女性から通り魔の濡れ衣着せられそうになってるので調査をお願いしたい！」と言った。祐介は、「わかりました。もう一度、お名前をフルネームでお願いします！」と聞いた。謎の男は、「萩原直人(はぎわらなおと)です」と答えた。祐介は、「萩原さん！ 依頼の相談を承りたいので芝浦探偵社までお越ししてくれませんか？」と聞いた。直人は、「はい！ 明日17時に伺います」と答えた。祐介は、「承知しました。それでは明日お待ちしております」と言った。直人は、「失礼します」と言って電話を切った。翌日の17時5分過ぎた頃に直人が芝浦探偵社にやってきた。祐介は、「お待ちしておりました」と言った。直人は、「遅れてすみません！」と言った。祐介は、「大丈夫です。では最初に年齢と職業を教えてくださいませんか？」と聞いた。直人は、「年齢は26歳で派遣社員として、ある倉庫内で働いています」と答えた。祐介は、「依頼の内容を詳しく教えてくださいませんか？」と聞いた。直人は、「僕は見知らぬ女性から体を触っては逃げる通り魔のデマの疑いを叩きつけられて警察が僕の行動を監視してるような気がするんです」と答えた。祐介は、「それはなぜ疑いかけられていると思ってますか？」と聞いた。直人は、「はい！ 僕には見知らぬ人の声が聞こえてくるんです。14歳過ぎた頃から幻聴と被害妄想が絶えずに聞こえてくる声を信じるようになりました」と答えた。祐介は、「診療内科で診てもらったことがありますか？」と聞いた。直人は、「はい！ 統合失調症と診断されました。でも薬の副作用が合わずに通院するのを退めました。僕の中では霊的現象のインスピレーションに冴えてるだけで不思議な能力で聞こえてくるのだと思ってます」と答えた。祐介は、「前

にも同じような統合失調症の方が依頼してきました。家の近くで通り魔事件がありましたか？」と聞いた。直人は、「いえ！ どの女性の声が聞こえるかわからない」と答えた。祐介は、「例えば当たり前ある人の声はいませんか？」と聞いた。直人は、「過去に遠い街に住んでた頃の生き霊となつた人の声が毎日のように聞こえてくる」と答えた。祐介は、「そうなんですか！ 今のところ手がかりがないので調査しようがないですね！」と言った。直人は、「そうですね！」と言った。祐介は、「その見知らぬ女性がどのような人物かがはっきりとわかったときは教えてください」と言った。直人は、「はい！ わかりました」と言った。祐介は、「よくパトカーを見かけたりしませんか？」と聞いた。直人は、「家から署が近いのでよく見かけます！」と答えた。祐介は、「そうですね！ パトカーをよく見かける人は自分が悪いことをしたのかと錯覚を受けるらしいです」と言った。直人は、「でも警察がきたとしてもアリバイで無実を証明してみせますよ！ 警察の無力な支配権力に負けない！」と言った。祐介は、「この案件は保留しておきます。手がかり見つかり次第で調査します」と言った。直人は、「はい！ そのときはお願いします」と言って芝浦探偵社から出た。3日前夜に田町駅西口前慶応仲通り商店街付近で通り魔事件が起きた。犯人は慶應義塾大学を通う女子大生のお嬢さんをつけ回ってはひと気のない脇道に入ったら黒いフード付きのパーカーを着てスマイルクラウンモスクのマスクを被って女子大生の体を触っては逃げる通り魔だった。同時期に通り魔が東京私立三田高校の女子高生をつけ回って日向坂付近で体を触っては逃げて清心女子学院の女子高生をつけ回って白金2丁目付近で体を触っては逃げる通り魔の事件が勃発していた。南麻布に暮らす直人は昼飯を食べに自転車で慶大キャンパス近くの次郎系ラーメンに行つて食べた。直人は次郎ラーメンを食べ終わって勘定を払ったら外に出て自転車で乗ろうとしたときに、二人の刑事に職務質問された。直人は黒いフード付きのパーカーを着ていたためにこないだの通り魔と背の高さや体型が似ていたことで間違われて慶大女子大生から通報された。直人はパトカーに乗って警察庁芝浦署に連行されて取調室で取り調べを受けた。島谷刑事は直人に、「身分証明書をコピーさせてくれ！」と言った。直人は無言で運転免許証を提示した。塚田刑事は、「この女性を知ってるか！」と言つて顔写真を見た。直人は、「知りません！」と言った。島谷刑事は、「加藤藍子(かとうあいこ)という慶大通つてる3回生の女子大生だ！」と言った。直人は、「知らないですね！」と言った。島谷刑事は、「5日前の夜に慶応仲通り商店街付近で通り魔の被害にあつてる。その時の犯人像の特徴が背が高く18センチぐらいで痩せ型で黒いフード付きのパーカーを着てスマイルクラウンモスクのマスクを被っていた。おまえじゃないのか？」と聞いた。直人は、「僕は流通の倉庫内で夜勤の仕事をしていた」と答えた。塚田刑事は、「本当か！」と言った。島谷刑事は、「じゃあ！ 模倣犯かよ！」と言つて直人に運転免許証を返した。直人は運転免許証を受け取った。島谷刑事は、「写真を撮ったんでな！ 今日帰ってもいい！」と言った。直人は、「僕はやってない！」と言つて顔写真を撮られた。硬直した直人は芝浦署から出て二人の刑事のパトカーに乗って自転車を置いてる次郎ラーメンに送つてもらつた。直人は南麻布のアパートへ自転車で行つてアパートに着いてから今日の出来事を芝浦探偵社に電話をした。祐介は、「こちら芝浦探偵社」と言った。直人は、「もしもし！ 萩原です！ こないだいった謎の女性の声は幻聴じゃなくて生霊の声でした」と言った。祐介は、「本当ですか！」と言った。直人は、「5日前に慶応仲通り商店街で慶大を通つて女子大生が通り魔の被害にあつてた。その時の通り魔の特徴が背が高くて体つきが僕と似ていて、犯人が黒いフード付きパーカーとスマイルクラウンモスクのマ

スクを被っていたために事件が起きた翌日のお昼に慶大のキャンパス近くにある次郎ラーメン三田店でラーメンを食べに来ているなら、僕が着ていた黒いフード付きパーカーが犯人が着ていたものと似てると疑われて二人の刑事に職務質問された。祐介は、「わかりました。詳しいことについて芝浦探偵社で聞きます」と言った。直人は、「はい！ また明日17時に向かいます」と言った。祐介は、「お待ちしております」と言った。直人は、「お願いします」と言って電話を切った。直人は心配で不安に落ちて暗くなるまで考え事をしてテレビを見ているおもしろみを感じず部屋にある冷蔵庫の中の残り物のご飯とおかずをレンジで温めて食べてお茶を飲んだ後で食器とコップを洗ってお風呂の湯を沸かして湯舟に浸かってお風呂から出て、歯を磨いて寝間で布団を被って寝ようとしても寝れなかった。翌朝に起きた直人は昨日の夜に夜勤を休んでいたのでもう眠って15時に起きてから活動することにした。直人は15時に目を覚まして顔を洗ってポットでお湯を沸かして日清焼きそばUFOにお湯を注いで3分過ぎたらお湯を捨てソースをかけて青のりをふって焼きそばUFOを食べたお茶を飲んでゴミを分別して片付けて歯を磨いてすぐに着替えてテレビを見て16時にアパートから出て階段を降りたところの駐輪場に置いてある自転車芝浦探偵社までこいでいった。直人は15分早く着いて自転車を置いて芝浦探偵社に入った。祐介は直人に、「どうぞ！ お待ちしております」と言ってテーブルに案内した。直人は、「ちょっと早く着来てすいません！」と言ってテーブルに向かい合いでイスに座った。祐介は、「警察に職質され体型が似てたことから犯人と間違われた」と答えた。祐介は、「被害者はどこの誰ですか？」と聞いた。直人は、「名前は確か加藤奈々(かとうなな)で慶大を通ってる優秀な女子大生の21歳でした。買い物で田町駅西口付近の人通りの少ない慶応仲通りの商店街を歩いてひと気のない路地に入ってきたら背後から黒いフード付きパーカーとスマイルクラウンモスクのマスクを被った男が体を触って逃げたといっていたそうです」と答えた。祐介は、「萩原さんは被害者の女性に犯人の特徴が似てると怪しまれたんですね！」と言った。直人は、「そうです！ 僕は通り魔事件が起きた翌日のお昼に次郎ラーメン三田店で何度かラーメンを食べに来ていて大学を早帰りされたときにたまたま見かけて怪しまれたみたいです」と言った。祐介は、「被害者に見かけて判断されてしまったんですか？」と聞いた。直人は、「はい！ 犯人の特徴が似てたからって、なんの証拠もなしにすぐに訴えるところだからいやなんだよ！ 平成の女(ひと)たちはな！」と言った。祐介は、「私もギリギリ昭和生まれで平成の女たちは幼少期から知らない大人に話しかけられたら、すぐに通報しなさいと親から厳しく躾(しつけ)られてるようだから！」と聞いた。直人は、「警察に疑われると人間不詳になりますよ！」と聞いた。祐介は、「警察からの疑いがひとまず晴れたようですね！」と聞いた。直人は、「その日の夜は仕事があったのでアリのバイが成立しました」と聞いた。祐介は、「そうですか」と聞いた。直人は、「パトカーに乗って芝浦署に連行されて取調室で取り調べられて写真も撮られたからいやだった」と聞いた。祐介は、「濡れ衣で逮捕されなくてよかったですね！」と聞いた。直人は、「顔写真を撮られたから変なデマカセの訴えがなければいいですが！」と聞いた。祐介は、「謎の女性の声がかかったのでもう依頼の件は大丈夫ですか？」聞いた。直人は、「まだ潜伏する通り魔事件の真犯人が捕まってないから油断できない！ 保留にしてください」と答えた。祐介は、「わかりました。保留します！」と聞いた。直人は、「冤罪にされたくないです」と言って芝浦探偵社から出ていった。5日後、芝浦署で直人に逮捕状が出て直人の住んでるアパートに島谷刑事

と塚田刑事と3人の警官が来た。島谷刑事は直人に、「17時40分、萩原直人容疑者を女子大生連続通り魔事件の重要参考人として暴行罪で逮捕する。署まで同行を願おうか!」と言った。直人は、「ちょっと待って! 僕は犯人じゃない! 証拠なしで不法捜索だろう!」と言った。塚田刑事は3人の警官に、「もう調べはついておる! おいっ! 連れていけ!」と言った。3人の警官は、「はい!」と言って直人をアパート部屋の中から連れ出した。直人は、「放せ! 今から仕事があるんだ! 勘弁してくれ! 僕にはちゃんとしたアリバイがある」と言った。3人の警官は、「いいからこい! おとなしくしろ! 詳しいことは署のほうで聞く」と言って直人はパトカーに乗せられて芝浦署に連行された。パトカーに乗った直人は、移動した芝浦署の取調室で取り調べを受けた。島谷刑事は直人に、「慶応仲通り商店街で起きた通り魔事件の被害者から怪しい人物と指摘されたが、おまえにはアリバイがあつて犯人と特定できなかった! しかし、同時期に三田高校と清心女子学院の女子生徒が体を触られる通り魔事件が起きて被害者におまえの顔写真を見せたら、『この人に違いない』と言って圧をかけた。直人は、『僕はやってません! その日は夜勤明けで休んでましたが、その場にいったことないので防犯カメラに写ってないだろう! やってないからなんの痕跡も見つからない! 証拠がないので僕だと実証できない!』と言った。塚田刑事は直人に、『おまえはスマイルク라운モスクのマスクを被った犯人と疑われた腹いせにひと気のない路地で女子高生に悪戯をした。おまえが凶星だろう?』と聞いた。直人は、『違います! それも慶応仲通り商店街で通り魔事件を起こした同一人物だろう! 真犯人は単独の犯行でスマイルク라운モスクのマスクを被ってたはずだ! 被害者はどんな女子高生か知りませんが! 恐らく通り魔事件の噂を聞いて僕に濡れ衣を着せて被害者のフリをして慰謝料を取ろうとしてるデマだろう』と言った。塚田刑事は、『噂をつけ! 二人の女子高生におまえの顔写真を見せたら確かに、『この人に間違いない』といってたんだ』と言った。直人は、『それだけで証拠になるんですか! その二人の女子高生は最初からグルかもしれないですよ! もう少し二人の女子高生の関係性まで調べたほうがいいんじゃないですか!』と言った。塚田刑事は、『おまえが犯人と断定できる証拠がないから証拠不十分で無実になると面子がかからないから質問に答えて、『僕がやりました』と吐け!』と言って録音機のテープに収録させるのに白状させて無実の罪でありながら偽りの証言を吐かせようとした。直人は、『そんなことをしたとしても黙秘権は避けられない! 裁判所で警官の脅迫を受けて嘘の証言をいわされてから暴力をふるわれて顔に痣ができたといえば法廷で不利な立場になるかもしれないぞ! 本当の調書は署内に倉庫に隠して、嘘の調書を裁判所に提示して報告するつもりか! 検察庁から検察官が訪れて犯罪の内容を調べるのに僕は嘘の証言をしないから内部調査されて証拠など聞かれてもアリバイを捏造と隠ぺい工作できず証拠のないまま嘘がバレるだろう!』と言って無意味な支配権力に対して挑発した。塚田刑事は、『おまえを釈放しても、どこにも逃げられない! どこかへ逃げたとしても全国に指名手配で貼る。こないだ田町駅周辺で女子大生が通り魔に殺害された事件と関連がありそうだ! 今度捕えたら余罪を追及して独房に入れて何年かしたら絞死刑だ!』と言って生活の侵害した。直人は、『逃げるわけじゃないが、逃げても証拠が上がらないことには指名手配で貼れないだろう! それに人を殺すような大きな事件など起こしてない! 日本の法律上は二人以上殺さないと絞死刑にならない! どんな手を使っても法廷でアリバイを証明させてみせる! その時はあんたらに1億円の損害賠償を請求して懲戒免職を免れないだろう!』と言った。塚田刑事は、『おまえどこかにナイフを隠してるだろう! 証拠隠滅罪にするぞ!』と

言った。直人は、「僕はナイフなど隠していない！ 証拠隠滅なんてしてないよ！」と言った。塚田刑事は、「この録音機に白状するまではここから出れないぞ！ おまえを釈放するわけにはいかない！」と言って人権を阻害した。直人は、「僕はこの場を離れることができなくても、絶対に嘘の証言をいえない！ 後でどうにかなるなんて曖昧な考えで嘘の自白してしまったら法廷で不利となって、それを証言にされて懲役30年ぐらいくらうかもしれないから」と言った。塚田刑事は、「嘘発見器なんか使ったとしても仕方ないようだな！ こうなったら腕づくで吐かせないといけないようだ！」と言った。直人は、「警察でも暴力を振るったら傷害罪だろう！ 顔など打撲傷など残せば暴力で嘘の証言をいわされたと言書に嘘の概要があると思われやすくなる」と言った。島谷刑事は冷酷な塚田刑事に、「このままでは拘留所のほうに移送できません！」と言った。塚田刑事は、「こいつん留置所に入れておくには事が大変だ！ 釈放せざるはおえんな！」と言った。塚田刑事は直人に、「仕方がないんでおまえを釈放することになった！ 誰かを呼び出すまでここにいろ！」と言った。祐介は3時間後に芝浦探偵社に電話があつて芝浦署に呼び出されて警官から直人の身柄を引き取った。直人は祐介に、「この辺には知り合いも友達もいないんでありますがございます」と言つて芝浦探偵社まで歩きながら話した。祐介は、「いきなりなんで警察沙汰になったんですか？」と聞いた。直人は、「こないだの慶応仲通り商店街で起きた通り魔事件の被害者に犯人と間違われて署に連行されて職質を受けたときに刑事に写真を撮られた顔写真を同時期に起きた2件の通り魔事件の被害者の小悪魔な二人の女子高生に見せたら、『この人です』といわれて、自宅アパートの二人の刑事と3人の警官がやってきました。僕はなにもやってない！ 関係ない僕を連続通り魔事件と結びつけようとしてる」と答えた。祐介は、「二人の女子高生は他校だけど、元々仲がいい二人で犯人に雇われて連んだデマかもしれない！ 二人の刑事は嘘の証言を鵜呑みにして罪を押し付けようと録音機テープに嘘の証言を吐かして改ざんして本当の調書を隠そうとしてる。直人は、『そうですよ！ 恐らく慶応仲通り商店街で起きた通り魔事件と、その周辺で同時期に起きた2件の通り魔事件について同一犯として連続通り魔事件の犯人とされようとしたので、僕は警察の気を引こうとせずに最後まで弱音を吐かない』と言った。祐介は、「被害者の二人の女子高生の顔写真は見ましたか？」と聞いた。直人は、「いいえ！ 三田高校と聖心女子学院の生徒といっていました」と言った。祐介は、「その二人の女子高生を探し出して真犯人を突き止めるしかないですね！」と言つて直人と芝浦探偵社に着いた。直人は、「戦慄の嵐は始まったところですよ！ 僕は泥沼の（ドツボ）にハマらない！ 穴に陥らないように犯人じゃないと認められるまで依頼継続をお願いします！」と言った。祐介は、「わかりました。芝浦探偵社の車で自宅へ送れません！ ここでいいですかね？」と聞いた。直人は、「どうも！ 僕は早く身の潔白を晴らしたい！ それに何事も持続力がないので仕事を頑張つて行きたい！ ここから家が近いんで歩いて帰ります」と答えた。祐介は芝浦探偵社に戻つ書類整理などして退社して足立区にある家に帰宅した。翌朝に起きた祐介は顔を洗って肉まんを食べてジャスミン茶を飲んで歯を磨いて着替えてぼろアパートから出て綾瀬駅から電車に乗つて三田駅に着いて歩いて芝浦探偵社に出社した。祐介は智宏に、「おはよ！ 今日萩原さんの連続通り魔事件容疑の疑いを晴らすために下校時間から夕方にかけて被害者の二人の女子高生を探し出すからカメラの準備を忘れずに！」と言った。智宏は、「わかりました。実はグルである」という証拠を撮ればいいでしょ！」と言った。祐介は、「そうだ！ 芝浦署の二人の刑事に二人の女子高生がグルである明確な証拠がない限り萩原さんの疑いは解けない！」と言った。智宏は、「でもど

うやって、あの二人の女子高生を探し出す？」と聞いた。祐介は、「前に浜口さんの案件の時に大和田瑠夏という三田高校に通う女子高生がいただろう！ その子から三田高校で通り魔事件の被害者とあんな女子に聞き出す手がある」と答えた。智宏は、「それは名案！」と言った。祐介と智宏は他の案件と書類整理などしていたら、下校時間が近づいてきて芝浦探偵社から出て芝浦探偵社の車に乗って三田高校に向かっていた。三田高校正門近くまで着いた祐介と智宏は、生徒たちが下校で正門から出てくるまで車で待機した。祐介は正門から生徒たちが現れた中から大和田さんを見つけ出して車から降りて正門まで歩いていった。祐介は、「大和田さん！ お久しぶりです！ 今からアキバでコンカフェのバイト！」と言った。瑠夏は、「今度はなんなんですか？」と聞いた。祐介は、「あっ！ 大和田さんのことじゃない！」と答えた。瑠夏は、「じゃあ！ なに！」と言った。祐介は、「最近、通り魔事件で被害にあった子が三田高にいと聞いて依頼の相談を受けてる人がいます。どの子が被害にあったかわかる？」と聞いた。瑠夏は、「確か1年生の松本莉緒菜のことじゃないかな！」と答えた。祐介は、「その子は学校が終わってから、いつもどこに居るか知っている？」と聞いた。瑠夏は、「大体あいつらは学校の成績が悪くて落ちこぼれたたちが集い集まった溜まり場ができた芝公園にいと聞いたことがある」と答えた。祐介は、「わかった！ ありがとう」と言って、その場を去って智宏の運転する車に戻った。智宏は、「あれ！ もう二人の女子高生の居場所がわかったんですか？」と言った。祐介は、「大和田さんは二人の女子高生のうちの一人を知っていた。後輩のことだからよくわからなそうだったけど落ちこぼれたたちの集まる芝公園にいと聞いた！」と答えた。智宏は、「じゃあ！ 芝公園にいこう！」と言って芝公園へ向かっていった。祐介は、「よろしく！ まだやつらはここにはいない！ わからないように近いて遠くから様子を見てあざとい二人が絡んだ証拠写真を撮る！」と言った。智宏は、「わかった！」と言った。芝公園に着いた祐介と智宏は車を駐車場に停めて車でやつらがくるのを待った。そして、車で待つこと40分ほど経ってからやつらと思える連中が芝公園にやってきた。

祐介と智宏は車から降りてやつらがいる場所まで近いていってスケボーなどやってる男子高生たちの近くにいる女子高生たちの中から三田高校と聖心女子学院の制服を着た二人の女子高生を探し出して智宏が莉緒菜らしき女子高生と一人の女子高生が絡んでるところをカメラでズームアップして証拠写真を撮った。警察のようで警察じゃない警視庁公安部潜入捜査係である安藤政子が芝公園に集まるやつらに麻薬グミや麻薬クッキーが出回っているという事で任務として女子高生に扮して潜入していた。祐介と智宏は、あの二人の女子高生が通り魔事件にあった被害者の莉緒菜と一人の女子高生なのかを確かめに行かねばならなかった。祐介と智宏は、あの連中が解散して芝公園から二人の女子高生がどこかに外れていくまで張り込んだ。祐介と智宏は20分後に二人の女子高生がどこかに離れたので追っていくと二人の女子高生がベンチに座った。祐介と智宏は二人の女子高生の姿を眺めてながらはしゃぐ年頃の様子を見て問いかけることにした。莉緒菜らしき女子高生のほうがカバンから黄色のグミの入った袋を取り出して袋から一人の女子高生に黄色のグミを渡した。莉緒菜らしき女子高生が袋から黄色のグミを取ってひと口で噛み砕いて一人の女子高生も黄色のグミをひと口で噛み砕いた。智宏は二人の女子高生の絡んでるところをカメラでズームアップして証拠写真を撮った。莉緒菜らしき女子高生と一人の女子高生は様子がおかしくなっていて、段々と体が楽になったのかベンチにもなれついた。祐介と智宏は二人の女子高生がおかしいと気づいて二人の女子高生の近くにいて問いかけてみた。祐介は莉緒菜らしき女子高生に、

「あのっ！ 君は三田高の生徒さんですかね！ もしかしたら松本莉緒菜さん？」と聞いた。莉緒菜らしき女子高生は、「いいえ！」と答えた。智宏は松本莉緒菜らしき女子高生に、「通り魔事件の被害者の女子高生がなんで一緒にいるのかカメラに納めたんだ！ 本当のことをいわないと警察に証拠写真を持っていくぞ！」と言って脅した。莉緒菜らしき女子高生は、「ちょっと待ってよ！ それは困る！ そうです！ 私は松本莉緒菜です」と言った。祐介は一人の女子高生に、「君の名前を教えてください」と聞いた。一人の女子高生は、「安田里穂」と言った。祐介は莉緒菜に、「俺たちは探偵で警察じゃないから安心してくれ！ 黄色のグミはいったいなに？」と聞いた。莉緒菜は、「絶対に誰にもいわないでください！ この黄色のグミはマンゴー味の大麻グミなんですよ！」と答えた。祐介は、「大麻グミはどこで誰から入手したの？」と聞いた。莉緒菜は、「いつも芝浦埠頭の倉庫で屯(たむろ)してる人」と答えた。祐介は、「その人の名前教えて？」と聞いた。莉緒菜は、「染谷啓之(そめやけいじ)」という人で普段ではYouTuberの収益を稼いでる」と答えた。祐介は、「染谷から体が楽になるグミをタダで提供する代わりに証拠写真なく濡れ衣を着せられている萩原直人という人に署で被害届けを提出してデマで訴えるように頼まれたの？」聞いた。莉緒菜は、「はい」と答えた。祐介は里穂に、「君もか？」と聞いた。里穂は、「はい」と答えた。祐介は、「聖心女子学院のお嬢さんがなんでそんなことするんだ？」と聞いた。里穂は、「高校になって成績がどん底に落ちてこのままじゃ大学いけないと悩んでいたら集会所の芝公園で莉緒菜と出会って、『私は付き合っていた彼に浮気されて別れ話で失恋して落ち込んでいたときにグミを噛み砕いたら楽になった！』と聞いてまさか大麻グミと知らずにひと口で噛み砕いて依存してしまった」と答えた。莉緒菜は祐介に、「この事は警察にいわないでほしい！ 私たちは強請(ゆすら)られていたんです。『萩原直人を犯人に仕立て上げなければ大麻グミの事を警察に漏らすぞ！』といわれた」と言った。祐介は、「連続通り魔事件の被害はなにかの理由をつけてデマだったと警察に萩原さんの濡れ衣を晴らしてくれたら絶対いわない！」と言った。莉緒菜は、「わかった！ そうしますよ！ 私たちは大麻グミをどうにかしてやめませう」と言った。里穂は、「私はこのことが親に知られたら大変なことになるんで警察にいわないでください！ 警察に通り魔事件の被害はデマと伝えます」と言った。祐介は、「わかったけど警察に大麻グミのこと怪しまれないように！」と言って二人の女子高生から去っていった。祐介と智宏は芝公園の駐車場に置いてる車に乗って芝浦埠頭の倉庫へ向かっていった。芝浦埠頭の倉庫に着いた祐介と智宏は物陰に隠れて麻薬密売人の染谷が密会した麻薬取引現場の証拠写真を撮ろうと思った。祐介と智宏はこの倉庫がバイク音のするツーリングの仲間たちが集うバイクの集会所だと気づいて染谷がYouTuberとして自分のバイクのことツーリングの動画チャンネルを制作してる様子がわかった。祐介と智宏はバイクの中で目立っているボスのような人物が染谷だと思った。胡散臭い染谷はハーレーをいじりながらバイクと雑談をして奥の壁側にあるソファに座ってエナジードリンクを飲んだ。その時に染谷が居座っているソファのところに黒いフード付きパーカーを着て染谷が大麻グミを受け取るときをカメラで証拠写真を撮って捉えた。祐介はあの黒いフード付きパーカーを着た男は萩原さんが被害者に間違われたパーカーに似てると思った。祐介は、「ここはひとまずにずらかろう！ やつらに見つかったら厄介になるぞ！」と言った。智宏は、「そうだな！」と言った。祐介と智宏は黒いフード付きパーカーを着た男が倉庫から外へ出ていって、追跡しようとしたらバイクに見つかった。バイクは祐介智宏に、「おまえらここでなにをしてるんだ？」と聞いた。祐介は、「ただの通りがかりです」と答えた。智宏は、「特に

なにもしてません！」と答えた。バイクは、「そのカメラで、どんな写真を撮ったのか確認させろ！」と聞いた。智宏は、「あっ！ いいですよ」と答えた。祐介は智宏に、「バカ！ よせよ！」と言った。インテリな智宏は、「これです」と言ってバイクにカメラの中の写真をスライドで見した。バイクは、「うおっ！ これはグラフィックインの平井はるかじゃないのか！」と言った。智宏は、「そうですよ！ アキバでイベント撮影会にいったときのですよ」と言った。バイクは、「そうか！ だがこんなところにいるのは少し怪しいからボスのところにこい！」と言って祐介と智宏はボスのいるところに連れていった。バイクはボスに、「こいつら倉庫近くについて、こそこそしてたんで連れてきた」と言った。ボスは智宏に、「大麻グミ(フツ)の取引きを撮っていたのか？」と聞いた。智宏は、「いいえ！」と答えた。バイクは、「カメラに保存してある写真を調べたらグラドルの平井はるかだけだった！」と言った。祐介はボスに、「おまえが密売人の染谷か？」と聞いた。ボスは、「誰だ！ そんなのは知らねえ！」と言った。祐介は、「しらばっくれな！」と言った。ボスは、「密売人？ なんで染谷を知ってる？」と聞いた。祐介は、「ある女子高生から聞いた」と答えた。ボスは、「二人の女子高生か！ 染谷のことをなにか知っているのか！」と言った。祐介は、「体が楽になるグミをもらう代わりに萩原という男にデマで容疑にかけることをやってのけた。二人の女子高生は大麻グミと知らずに依存していつて受け取ってたらしい！」と言った。ボスは、「あのJKども！ ちくりやがったか！」と言った。祐介は、「さっきまでいた黒いフード付きパーカーを着た男は何者だ！ あの男が通り魔で庇(かば)ってやってんじやかいのか？」と聞いた。ボスは、「あいつは大麻グミやクッキーを密売してる」と答えた。祐介は、「やっぱり染谷だろ？」と聞いた。ボスは、「そうだ！ だが麻葉密売人じゃない！」と答えた。祐介は、「黒いフード付きパーカーを着た男とは仲が良さそうだったな！」と言った。ボスは、「おまえらは警察(ポリ)か？」と聞いた。祐介は、「俺たちは探偵だよ！」と答えた。ボスは、「取引現場を見られたからにはポリにパクられるから口止めをしないといけない！ 痛い目にあってもらおう！」と言った。智宏は祐介に、「逃げよう！」と言った。祐介は、「俺は小学生の頃から剣道を習っていた五段だ！ 後ろに下がっている！」と言って床に転がっている鉄パイプを拾った。飢えた野蠻人で両腕にタトゥーの入ったボスは金色のメリケンサックを両手の指にはめてバイクたちを呼んで祐介と智宏を取り囲んだ。精神を極めた祐介は鉄パイプを両手に握ってボスの染谷に向けて構えた。碌でもないバイクたちは、祐介と智宏を殴ろうとして前後から左右から突っかかっていったが、祐介の素早い動きの立ち回りで振るった鉄道パイプで面と胴を打たれた。素手で立ち向かえず無防備な智宏は、何度か祐介に助けられてカメラを守ろうと隙を見て逃げ出した。物に躓(つまず)いて転んでカメラのレンズが割れた。祐介は、バイクたちを鉄パイプで打ち止めしたら染谷がメリケンサックを両手の指にはめた拳で左からも右からも振るってきた。祐介は染谷の攻撃を避けていって、染谷が空振りをするたびに仕器が破壊されていったが、染谷の面と胴を打っていつて最後に背中を打って染谷を打ち止めた。祐介は染谷に、「あのフード付きの黒いパーカーを着た男は誰だ？」と聞いた。染谷は、「俺は知らねえ」と答えた。祐介は、「教えないなら大麻グミを所持して未成年に与えたことを警察にちくるぞ！」と言って染谷の腹に鉄パイプで突いた。染谷は、「わかった！ あのフード付きの黒いパーカーを着た男は昔からの幼なじみで普段からいいやつだったのに高校になって、すごい好いていた女子に思い切って告げたら断られて大失恋したらしい！ それ以来、女子に消極的になって彼女のいないまま20歳を過ぎてから26歳まで人生が狂い出して、女子に対して異常な性癖を

起こした」と言った。祐介は、「あの男の名前を知りたい?」と聞いた。染谷は、「佐山洋平だ! 高校の頃に好きだった女子が高校を卒業したら名門の慶大に受かって通ってたから慶大生の女子を襲うまねをしたんだ!」と言った。祐介は、「佐山の素性がわからない?」と聞いた。染谷は、「西麻布のディスタンス寿というマンションに住んでいる。俺はなんにも悪くない! 佐山が俺に、『ただで大麻グミをやる代わりに俺がいう二人の女子高生にタダで大麻グミをやる代わりに通り魔犯と疑われてる萩原という者に濡れ衣着せてでっちあげデマをさせろ!』と頼まれた」と答えた。祐介は、「わかった!」と言って智宏と一緒に倉庫から外へ出ていった。智宏は祐介に、「やったじゃん! 祐介!」と言った。祐介は、「それにしてカメラの中の証拠写真はすべて削除したのか?」と聞いた。智宏は、「そんなとぎのために芝浦探偵社のパソコンにデータ転送しといた!」と答えた。祐介は、「よかったよ! SDカードを抜き取られたら、どうしようかと思った!」と言った。智宏は、「それよりも転んだときにカメラのレンズが割れて災厄だ!」と言った。祐介は、「また買えばいいよ!」と言った。智宏は、「そうはいってもカメラのレンズって結構な金額して高い!」と言った。祐介は、「証拠写真以外はグラドルばかりなのか!」と言った。智宏は、「そうでもない!」と言った。祐介は、「そんな趣味があったのか!」と言った。智宏は、「人の跡を追う仕事をしてたらストレスが溜まる」と言った。祐介は、「そうだな!」と言った。智宏は、「警察がこないうちにここはしばらくろう! 正当防衛じゃなく過剰防衛で傷害罪に問われるとあしでまといだ!」と言った。祐介は、「そうだな! 有段者は不利だ! 二人の女子高生を大麻グミ所持から守るためにやたらを警察に渡さないほうがいい! この事は公(おおやけ)にできない!」と言った。智宏は、「やられ損になるところだったんで2倍返さないで抑えられなかった! 命守るためやむを得ない!」と言って祐介と一緒に車に乗って芝浦探偵社へ向かっていった。芝浦探偵社に着いた祐介と智宏は、パソコンの中にカメラと紐づいたアプリケーションからデータが送られて来てることを確認した。祐介と智宏は使っているカメラのアプリケーションのデータが送られていたので安心してすべて写真画像チェックするたびに佐山が気になった。祐介は智宏に、「今日の夜に染谷がいていた西麻布のディスタンス寿にいつてみよう!」と言った。智宏は、「暗躍する佐山の動きで連続通り魔事件の手掛かりを追ってけば証明できるだろう!」と言った。祐介と智宏は他の案件の書類整理などをして15時を過ぎた頃に芝浦探偵社から外に出て車に乗って西麻布のディスタンス寿へ向かっていった。西麻布のディスタンス寿に着いた祐介と智宏はディスタンス寿の付近に車を停めて張り込みをして様子伺った。祐介と智宏は張り込みして待つこと50分ぐらいたしたらディスタンス寿の出入り口からフード付きの黒いパーカーを着た佐山が出て来た。祐介は智宏に、「フード付きの黒いパーカーを着た佐山を追って行く! なにかあったらスマホで連絡するよ!」と言った。智宏は、「了解! 僕はどこかに車を停めて待機しとくから!」と言った。祐介は佐山が西麻布に駅がないために六本木駅のほうへ向かっていってること気づいて地下鉄東京メトロ日比谷線に乗って途中で山手線に乗り換えて田町駅までいくのかと思いつながら佐山を追っていった。祐介は佐山の跡を追っていったら、佐山が六本木ヒルズにある六本木駅を通り過ぎて六本木1丁目近くのコンビニに入った。祐介は急いでスマホを取り出して智宏に電話をかけた。智宏は祐介に、「はい! もしもし!」と言った。祐介は、「俺だ! 佐山は六本木1丁目近くのコンビニで雑誌を読んでいる。コンビニから出てくるまで待ってる。佐山がコンビニから出たら追跡を再開する!」と言った。智宏は、「僕はどうすればいい?」と聞いた。祐介は、「とりあえず六本木1丁目近くに来て車で待機していてくれ!」と

答えた。智宏は、「わかった!」と言った。祐介は、「よろしく!」と言った。智宏は、「了解!」と言った。スマホの電話を切った祐介は、夜の寒いで孤独が止まらないでコンビニの外で待つこと30分ぐらいして六本木1丁目駅から女子大生が目の前を通過したら佐山がコンビニから出て女子大生を追っていったので佐山を尾行していった。祐介は女子大生を追う佐山がひと気のない路地に入って背中に背負ってリュックサックを外してチャックを開いてスマイルク라운モスクのマスクを取り出して顔に被ってリュックサックのチャックを閉めて背中に背負って黒いパーカーのフードを頭に被った。祐介は女子大生に襲いかかろうとしてる佐山に、「なにをしてる!」と言った。祐介はスマイルク라운モスクのマスクを被った佐山が咄嗟に逃亡して追跡した。祐介は取り逃したらまずいと必死に追って坂を登ったところでスマイルク라운モスクのマスクを被った佐山を取り捕まえた。祐介はスマイルク라운モスクのマスクを被った佐山の腕を掴んで解き払われてズボンのポケットから折り畳み式ナイフを取り出した。スマイルク라운モスクのマスク被った佐山は祐介に折り畳み式ナイフを振るっていった。その時に銃声が鳴って近くの壁に弾丸が当たったときに警視庁南麻布署の松原刑事が現れた。正義感のある松原刑事はスマイルク라운モスクのマスクを被った佐山に、「動くな! 佐山!」と言って銃を向けた。スマイルク라운モスクのマスクを被った佐山は、「うるさい! 俺は佐藤だ! こいつを見殺しにしてもいいのかよ!」と言って祐介の首に折り畳み式ナイフの刃を突き付けた。松原刑事は、「今度は的外さない! おまえを麻薬所持と売買及び迷惑条令違反と殺人罪で逮捕する」と言った。祐介は佐山のスマイルク라운モスクのマスクを下に引っ張ってずらして目をくらました隙に離れて松原刑事が至近距離から狙って佐山の右足の太腿を撃って佐山が地面に倒れた。松原刑事は(もだ)悶いた佐山が被ったスマイルク라운モスクのマスクを外して正体を明らかにした佐山の手を持つる折り畳み式ナイフを奪って手錠をかけた。松原刑事は祐介に、「ケガはないか?」と聞いた。祐介は、「はい」と答えた。松原刑事は、「なんで危ない真似をしたんだ?」と聞いた。祐介は、「探偵をやっていて、連続通り魔事件で疑われた萩原さんから依頼を受けて濡れ衣を晴らすために犯人を探していた」と答えた。松原刑事は、「探偵が余計なことするな!」と言って離れていった。佐山は麻薬取締法で睨んでいた管轄外の松原刑事によって摘発されて刑務所病院へ救急車に乗せられて緊急搬送された。逮捕する権限を持ってない安藤捜査係のお陰で佐山が絞り出されて連続通り魔事件の解決に結びついた。警察は1週間後に田町駅周辺で起きた女子大生殺傷事件に関連がないか他に余罪がないか住んでいた西麻布のディスプレイスタジオに自宅捜査に入り畳み式ナイフに付着した血液成分がD・N・A鑑定したら二人の女子大生の物と照合が一致して殺人鬼の佐山容疑者を再逮捕した。翌朝に起きた祐介は、フレンチトーストを食べてホットミルクティーを飲んでいつものように電車に乗って芝浦探偵社へ向かっていった。芝浦探偵社に着いた祐介は警察から捜査の協力をしたことになって感謝状の連絡があった後で佐山の情報を入手して萩原さんに電話をかけて調査完了したことを連絡した。直人は、「もしもし!」と言った。祐介は、「芝浦探偵社の竹本です。依頼の件について調査を完了しました。連続通り魔事件の真犯人が確保されました。二人の女子高生が犯人の友人に大麻グミをタダで提供する代わりに萩原さんに罪を被してデマをするように指示した」と言った。直人は、「良かったですよ! ようやく冤罪が晴れました」と言った。祐介は、「犯人は出会い系サイトの管理者で2千万円も荒稼ぎして闇サイトで大麻グミを売買していた。もう警察から萩原さんは追われ

ないでしょう！」と言った。直人は、「警察に証拠排除されて根拠のない無鉄砲なやり方で無理やりこじつけられそうになって証拠のない嘘を吐かすために暴力や迫害を受けたとしても傷害罪にできないか？」と聞いた。祐介は、「警察に抵抗したり反抗したり歯向かったりしたら、その場で公務執行妨害に問われるでしょう！警察も不祥事を起こす事があります。田舎では滅多に事件は起きないが、起きるときは惨殺など大きな事件が起きます」と答えた。直人は、「昔から強欲傲慢の卑怯なやり方で取り調べる警官がいたようです。家でなにもしないで生きてるようなオタクを疑ったようだけど、今は防犯カメラがあるから、すぐに特定できるだろう！事件現場に僕の指紋も痕跡もないはずだから証拠はない」と言った。祐介は、「そう！単身赴任でフィリピンのマニラにいた日本人が何者かにカバンに麻薬を入られてフィリピン警察に職質と事情聴取されてカバンの中から麻薬が見つかって無実の罪で逮捕されました。その日本人は無期懲役で豚箱に入れられたが、2年で釈放されたいい加減な取り調べがありました」と言った。直人は、「まだ治安がいい日本は時効があつてアメリカには時効がないとか！」と言った。祐介は、「今回の依頼は危険が迫る中で命懸けの危ない調査となりましたので高い金額になります。請求書できたら郵送で送ります！」と言った。直人は、「無実が証明されて良かった！僕は警察に秩序を乱した者と扱われて世間の目から苦痛を味合わされそうになった！」と言った。祐介は、「警察の不可抗力を抑えて支配権力から逃れた」と言った。直人は、「はい！警察が人権無視をするなんて！堀の中で何年も食らうところだった！まったく酷い目にあつた」と言った。祐介は、「でも萩原さんにはちゃんとポリシー(方針)があります。これからも頑張ってください！ありがとうございます」と言った。祐介は、「ありがとうございます！報酬は期日までに必ず払います」と言って電話を切った。直人は最終的な結末に陰謀の畏を抑えて1週間後に送られた請求書の報酬を芝浦探偵社に振り込んだ。女子大生は佐山に狙われた最後の獲物でミス慶大の中川絵梨香(なかがわえりか)という大学4年生だった。絵梨香は佐山にSNSで個人情報報を盗まれると知らず付きまといストーカー被害にあつてた。最初の被害者の藍子は佐山の写真を見て通り魔が細くて鋭いナイフのような狂気だったことから佐山と確認して直人の疑いが勘違いで終わった。直人は折り重なる危機に逃れて心が癒えるまで長い時をかけて永遠の癒しを求めた。二人の女子大生は出回っていた大麻グミ依存を克服して暗黙の了解で闇の中に閉ざされた。佐山は西麻布に住むディスタンス寿のベランダに大麻を栽培した植木をいくつか並べて大麻工場を設けていた。大麻はタバコのきついやつと思うけど麻薬なので禁断症状が起きて人格を失い記憶をなくして骨が脆くなる症状が起きるから禁じられた。汚い家業で荒稼ぎした佐山は刑務所病院で精神鑑定を受けたが、異常なしと出たために裁判をして有罪となって刑務所に護送されて罪を償った。

愛と疑惑

深い眠りに就いた祐介はハンチング帽に沢山お金を入った夢を見て目が覚めたら、いつものように顔を洗ってジャムパンとヨーグルトを食べて牛乳を飲んで歯を磨いて洋服に着替えてぼろアパートから出て電車に乗って芝浦探偵社へ向かった。芝浦探偵社に着いた祐介は、芝浦探偵社に出社して窓からゆりかもめ線のモノレールが走ってる港町の景色を眺めながら智宏と一緒にいつもの仕事を始まる前のホットコーヒーを飲んで話しをしていた。智宏は祐介に、「平成に生まれた女ってなにを考えてるかわからない。すぐに訴えようとしてきたりお金で解決しようとしてくるところがある」と言った。祐介は、「そうだ！俺たちはギリギリ昭和の生まれだ！よくわからないことが沢山ある」と言った。皮肉づらをした同僚の孝治と修造が祐介と智宏のいる窓辺にやってきて、なにかといびりをし始めた。孝治は祐介に、「今回の案件は見直した。まだまだ殺人事件の真犯人を探して突き止めてないのでダメですね！」と言って貶した。祐介は、「それはこれからだ！」と言った。孝治は、「今まで女のケツを追っていたのに、今度は男のケツを追ってるのか！」と言った。祐介は、「ケツなんて追ってない！重要人物や真犯人を突き止めるために跡を追ってるんだ！」と言った。修造は祐介と智宏に、「おまえたちはノウハウもなにもないから探偵として失格だ！」と言った。祐介は、「探偵業は資格がなくてもノウハウがあれば誰でもできる仕事なんだ！俺たちはちゃんとノウハウと実績がある」と言った。孝治と修造は自分たちの席に戻った。席に着いた祐介と智宏は昼過ぎた頃に青山1丁目のマンションで富士テレビの関亜希子(せきあきこ)アナウンサーが密室でクローゼットの中で首を括っているのを管理人が発見したショックな情報を朝刊新聞で知って警視庁は遺書が見つからなかったために自殺か他殺か何者かに殺された気配がなかったか自殺幫助したものがいなかったか対人関係を調べているという新聞記事を読んだ。関アナは24歳で警察の情報によると死亡推定時刻3日前の14時42分で縁起の悪い数だった。芝浦探偵社に1本の電話がかかってきた電話機の受話器を取って応答した。祐介は謎の女に、「芝浦探偵社の竹本です」と言った。謎の女は、「私は寺田美優(てらだみゆう)」と申します。関さんの同僚で同じ富士テレビのアナウンサーをしています。亜希子には彼氏がいました。私には将来の夢や希望を語ったりした亜希子が自殺するはずがない！なにか裏があると思います。だから依頼お願いします」と言った。祐介は、「わかりました。いつ来店されますか？」と聞いた。美優は、「明日の夕方17時に」と答えた。祐介は、「わかりました」と言った。美優は、「よろしくお願いします」と言って電話の受話器を置いて切った。翌日の夕方17時に予定時刻どおり美優がやってきた。祐介は美優に、「いらっしやいませ！」と言って奥のテーブルに案内した。美優は、「ありがとうございます」と言ってテーブルのイスに座った。祐介は、「お待ちしておりました」と言って美優と向かい合いでテーブルのイスに座った。美優は、「昨日の仕事でお昼休みに電話したとおり亜希子が自殺するはずがない！」と言った。祐介は、「そうですか！関さんと同じ富士テレビでアナウンサーをされてるようですが同期ですか？」と聞いた。美優は、「はい！そうです。同期です。私は早生まれなので23歳の時に一緒に入社しました。私はスポーツ実況アナ担当がメイン

ですが！」と言った。美優は、「野球場でレポーターをやっています」と言った。祐介は、「関さんは普通のニュースキャスターでしたよね！」と言った。美優は、「そうですね！最近では冠番組のアシスタントなどやってました」と言った。祐介は、「それで今日の朝刊から大きく取り上げていたんですね！」と言った。美優は、「私は亜希子が亡くなる前日の夜、一緒にレストランで食事をしました」と言った。祐介は、「そうでしたか？」と聞いた。美優は、「4日前の亜希子は顔色良くて笑顔でなにも問題のない様子で夢を語りあって謙虚に過ごしてましたよ！」と答えた。祐介は、「電話では関さんに結婚を誓った彼氏がいるといっていましたか、どこの誰なのか知っていますか？」と聞いた。美優は、「知っています」と答えた。祐介は、「誰なんですか？」と聞いた。美優は、「バラエティ番組の司会者であるお笑い芸人の速水純太（はやみじゅんた）です」と答えた。祐介は、「それで関さんはバラエティ番組のアシスタントをして速水さんと知り合ったんですね！」と言った。美優は、「はい！」と言った。祐介は、「速水さんと関さんの間で破局話でなんらかのトラブルがあったかもしれないので確かめる必要がある」と言った。美優は、「今日の夜は亜希子のお通夜で速水さんがくると思いますよ！」と言った。祐介は、「そうですね！関さんのお通夜はどこで行われますか？」と聞いた。美優は、「それは青山会館です」と答えた。祐介は、「わかりました。私は関さんの関係者を装って関アナの通夜に行くので一緒に行きたい！」と言った。美優は、「青山会館まで行く途中で喪服に着替えなさいといけませんか？」と聞いた。祐介は、「いいですよ！」と答えた。芝浦探偵社の倉庫にある喪服に着替えた祐介は、ボサボサ髪を整いて髭を付けて変装して美優と一緒に芝浦探偵社から外に出て車に乗って青山会館へ向かった。祐介は車を運転して青山会館まで向かう途中で美優の南麻布にあるマンションの自宅付近で美優を降ろして車で待機した。祐介は20分して車に戻ってきた美優を車に乗っけて青山会館へ向かった。青山会館に着いた祐介と美優は青山会館専用駐車場に車を停めて車から降りて青山会館の入口に行った。青山会館に入った祐介は受付で富士テレビ関係者を偽って3万円の入ったお布施を受付員に渡して美優と一緒に入ることができた。祐介と美優は青山会館に入って部屋の引き戸を開いて関さんの遺族たちが集まっていたが、家族葬なのでまだ速水さんの気配なかった。祐介と美優は遺族たちに礼して奥に進んで棺の中の関さんの遺体に手を合わせた。棺の中を覗いて見た祐介と美優は関さんの遺体の顔を見ていきなり泣き崩れる美優を慰めた。孤立する祐介と美優は見知らぬ人ばかりで人見知りしそうになった中で遺族たちが関さんの不幸を話したり凌いでいるときに速水さんが来た。祐介と美優は速水さんが遺族たちに礼をして奥に進んだら棺の中の関さんの遺体に手を合わせた後で泣き崩れる姿を拝見した。祐介は気を休めた速水さんが関さんの両親と兄弟と親戚と関さんを凌いでいるところに割り込んだ。祐介は純太に、「私は富士テレビ企画部でバラエティ番組を提案する仕事をしてる竹本です」と言った。純太は、「そうですね！お笑い芸人は企画部と提案できませんかね？」と聞いた。祐介は、「はい！そうですね！富士テレビに企業機密事項がありますからね！」と答えた。純太は、「田中プロデューサーなら打ち合わせで会ったことがある」と言った。祐介は、「彼はバラエティ番組の総指揮をとってる。私はタレントを決めたりするディレクターです。それで私が速水さんを司会に決めました」と言った。純太は、「そうだったんですか！ありがとうございます」と言った。祐介は、「ここではなんなのであちらの居間で話しますか？」と聞いた。純太は、「そうですね」と答えた。祐介と純太は奥にある遺族たちが寝泊まりする部屋に移動した。純太は、「なんで僕を司会に選んでくれたんですか？」と聞いた。祐介は、「お笑いコンビ

のマイチングブラザーズ時代の相方のツッコミがおもしろかったから」と答えた。純太は、「お陰で知名度が上がった!」と言った。祐介は、「話は変わりますが、関さんは残念でしたね!」と言った。純太は、「気が動転してなにがなんだかどうしてこの世を去ったのかわからない」と言った。祐介は、「結婚の約束をしていたのでは?」と聞いた。純太は、「僕は36歳でバラエティ番組で高収入を得て仕事の打ち合えて家を建てる計画をした」と言った。祐介は、「私がバラエティ番組に関さんを選んで」と言った。純太は、「それじゃあ! 僕たちの愛の惹きつけ役だったんですね!」と言った。祐介は、「ですけど実際は愛のキューピッドにはなりませんでした」と言った。純太は、「なんだろう! 寂しい」と言った。祐介は、「関さんが亡くなった日はどうしてましたか?」と聞いた。純太は、「久しぶりに吉川と一緒にマイチングブラザーズの漫才ショーの打ち合わせした後で某テレビ局のアイドルの冠番組の司会を務めて収録した」と答えた。祐介は、「なかなか忙しいようですね!」と言った。純太は、「このところ亜希子と仕事以外で会うことがありませんでしたね!」と言った。祐介は、「特に喧嘩別れや浮気などなにか別れ話で破局なくトラブルなかったようですね!」と言った。純太は、「とんでもない! 僕は亜希子を一途に愛していた」と言った。純太は、「そうですね! 私は関さんが速水さんとの結婚を楽しみにしていたのに自殺するはずがないと思っています」と言った。純太は、「僕もです。亜希子がなんらかのトラブルに遭遇して何者かに殺されたんじゃないかと思ってる」と言った。祐介は、「ここ最近で関さんがトラブルやいざこざにあっていた様子なかったですか?」と聞いた。純太は、「そんなことはなかったと思います。ですが一つだけ迷惑メールに困っているとはいってました」と言った。祐介は、「詐欺グループによる魂胆のある迷惑メールとか?」と聞いた。純太は、「わかりません! 窃盗団に狙われて金を掠められたかなんらかの金銭トラブルにあって借金などなかったと思いますが、お金のことであれば真っ先に大富豪の僕に相談するでしょうから」と答えた。祐介は、「関さんの暮らした青山1丁目の15階建てマンションは最上階の真ん中から左側の一番隅にある1501号でした。犯人はどうやって15階にある関さんの家に侵入して関さんを殺害してクローゼットの衣紋掛けの鉄棒に吊るして自殺したかのように入れて家の中から鍵を閉めて外に出れたのでしょうか?」と聞いた。純太は、「マンションの防犯カメラに怪しい人物が写っていないか警備員さんに調べてもらったほうがいいですよ」と言った。祐介は、「私はこれで失礼します」と言った。純太は、「またお会いできたら!」と言った。祐介と美優は通り際に遺族たちに礼して青山会館から外に出て専用駐車場に停めた車に乗って美優を自宅のマンションまで送って芝浦探偵社に戻って裏倉庫で髭を外して車の鍵を置いて退社してぼろアパートに帰った。翌朝に起きた祐介は、顔を洗ってミックスフルーツサンドを食べてオレンジジュースを飲んで歯を磨いて洋服に着替えてぼろアパートから出て、電車に乗って芝浦探偵社に向かった。芝浦探偵社に着いた祐介は、仕事前いつもの朝のホットコーヒーを飲みながら智宏と話した。祐介は智宏に、「昨日の夜は寺田さんと一緒に関さんのお通夜に行って彼氏だった速水さんと話ができた」と言った。智宏は、「どうでした?」と聞いた。祐介は、「速水さんは関さんの命日にお笑いコンビの相方とイベントの漫才ショーの打ち合わせとアイドル番組の司会で忙しかったらしいぞ!」と答えた。智宏は、「関さん速水さんとの間にトラブルはなかったのか?」と聞いた。祐介は、「特にはなかったみたいだけど嫌がらせ迷惑メールに困ってたと聞いている」と答えた。迷惑メールは具体的にどんなことがわかってる?」と聞いた。祐介は、「わから

ないが、特殊詐欺集団の仕業だと思っている。関さんは何者かに犯罪傾向のあるやつらに巻き込まれた」と答えた。智宏は、「寺田さんは関さんに迷惑メールがあったことを知らなかったのか?」と聞いた。祐介は、「知らなかったと思う。なにかあれば最初に教えてるだろう」と答えた。智宏は、「関さんの幼なじみの親友なら悩みを相談されてるかもしれない!」と言った。祐介は、「そうだ! お通夜に来てなかったけど関さん葬式の参列者の名簿に2名お通さんにまだ来てない謎の女子がいた。それらは親友か親戚かもしれないけどな!」と言った。智宏は、「今日の関さんの告別式に参列したらいいじゃないか?」と聞いた。祐介は、「その前に関さんの命日に自宅のマンションの入口から防犯カメラに不審な人物が映ってなかったか調べたい! それが終わる次第で決める。お昼までに間に合えば行くつもりなんだ!」と言った。智宏は、「わかった! 僕も付きそうから!」と言った。祐介はデスクワークに戻って、今日の朝刊を見て関アナの自殺と判断した記事を読んだときに、これは急いで取りかからないと手をくれになるぞ!」と言った。祐介と智宏は倉庫にある変装グッズを探し出して準備できて芝浦探偵社から出て車に乗って智宏の運転で関さんが住んだサイエンス参番館へ向かった。サイエンス参番館に着いた祐介と智宏はサイエンス参番館の道路脇に車を停めて変装で髪をポマードで固めて銀縁眼鏡をかけてスーツにバッチ付けて検察官を装った格好で車から降りてサイエンス参番館の入口の管理室で管理人に会った。祐介は管理人に、「失礼します。関さんの事件の内容を調査に伺いに検察庁から来ました」と言った。管理人は、「富士テレビから関さんがテレビ局に2日経っても出社してこないと連絡があったのでメンテナンスを呼んで無理に鍵が閉まったドアをこじ開けてもらって関さんを探したところクローゼットで関さんが首を括っているのを発見した」と言った。祐介は、「関さんの家を拝見させてくれませんか?」と聞いた。管理人は、「今、関さんの家は閉鎖されてKEEP OUTの立ち入り禁止の黄色いテープが貼られて警察の許可なしじゃあ誰も入れないでしょう!」と答えた。祐介は、「大丈夫です。私たちは警察の許可を受けてる」と言った。管理人は、「わかりました!」と言った。祐介と智宏は管理人の後ろについてエレベーターで15階まで上がって関さんの住んでいた家まで案内してもらい家のドアを開けてもらった。関さんが住んでいた家に入った祐介と智宏は、全体を見渡して特に争った形跡はなかったが、床下に関さんの愛用していたと思われる真っ赤なヘアバンドが落ちていたことに気づいた。祐介は、「調査の協力ありがとうございます」と言った。管理人は、「いえ! とんでもない! なにかあればなんでも仰ってください!」と言った。祐介は、「そうですね! 関さんの命日に入口から不審な人物がやってくるような気配はなかったですか?」と聞いた。管理人は、「なかったと思います」と答えた。智宏は管理人に、「防犯カメラには不審な人物が映ってないか調べさせてもらえませんか?」と聞いた。管理人は、「いいですよ! でも防犯カメラは警備会社がやっているのでこちらにお問い合わせください」と答えた。智宏は、「わかりました」と言って警備会社の連絡先をメモにとった。祐介と智宏は管理人と一緒に関さんの住んでいた家から出てエレベーターで1階に下りてサイエンス参番館の入口から出て車に乗って警備会社へ向かった。警備会社に着いた祐介と智宏は警備会社のビルの前に停めて車から降りて警備会社に入った。祐介は、「失礼致します。関さんの事故事件の内容を調査しに検察庁から参りました」と言った。警備員は、「関さんは自殺だったんですか? 他殺だったんですか?」と聞いた。祐介は、「関さんは前から嫌がらせ迷惑メールの被害を受けていたことから他殺の可能性があるとみています」と答えた。警備員は、「警察は関さんの命日の防犯カメラの映像を見せたら不審な人物など映らなかったといっ

た」と言った。祐介は、「私たちの仕事は事故事件の内容が的確であるか調べなくてはいけません！ 関さんの命日の防犯カメラの映像を見してくれませんか？」と聞いた。警備員は、「警察は防犯カメラの映像は誰にも見せないようにといわれましたが、検察庁の方なら仕方ありませんね！」と答えた。祐介は、「お願いします！」と言った。警備員は、「わかりました」と言ってパソコンを開いて関さんの命日に防犯カメラが録画を保存した映像を見せた。祐介は、「昼過ぎだったから14時42分までサーチ(早送り)して誰かが入口に現れたら止めてほしい」と言った。警備員は、「はい！」と言った。祐介と智宏は警備員が映像をサーチしていくなかで人が入口に入ってくるたびに止めて見ては確かめていった。祐介は14時42分の30分前に帽子を被って黒いサングラスにマスクをかけた怪しげな男がサイエンス参番館の入口に入ったところで映像を止めた。祐介と智宏はエレベーター内にある防犯カメラが捉えた映像で怪しげな男が最上階で降りたのを確認した。祐介と智宏はサイエンス参番館の入口から中央にあるエレベーターで最上階に降りて左側の一番端くれまで設置されている防犯カメラがと遠くて関さんが住む1501号室の前で怪しげな男が帽子を脱いでサングラスとマスクを外したときの容姿が見分けつかなかった。祐介と智宏は怪しげな男が関さんの家に入っていくのを見て関さんどんな関係の人物なのかわからないまま宗教の勧誘か悪徳商法にやられたのかと思った。祐介と智宏は防犯カメラに映る怪しい男を見落としてることで警察の裏で隠された謎があると疑った。祐介は関さんの家の前で怪しげな男が帽子を脱いでサングラスとマスクを外したときの素顔が速水さんに見えたのと関さんの家にすんなり入れるような関係だとしたら、やっぱり速水さんしかいないと推測した。祐介は警備員に、「2日後の関さんの様子がおかしいと気づいてから管理人が関さんの家を訪ねてくるまでのをサーチしてください」と言った。祐介と智宏は関さんの亡くなった時間から怪しげな男が関さんの部屋から出て来なかったから玄関のドア以外に15階の窓から出る場所などなかったので不思議に思った。祐介と智宏と一緒に警備会社から出てエスカレーターで降りてビルの前に停めていた車の助手席に乗って寺田さんに電話をかけた。祐介は美優に、「芝浦探偵社の竹本です」と言った。美優は、「もしもし！」と言った。祐介は、祐介は、「今日の関さんの告別式は何時からですか？」と聞いた。美優は、「11時からです」と答えた。祐介は、「今から行ったら合おうので遺族の方に、『参加します』と伝えてください」と言った。美優は、「はい！」と言った。祐介は、「お願いします」と言った。祐介と智宏は車で青山会館へ向かった途中でイトーヨーカドーに立ち寄ってからトイレに入って髪を洗い流してタオルで抜いて髭を付けて礼服に着替えて青山会館へ向かった。青山会館に着いた祐介と智宏は受付で参列の許可を受けて運転手の智宏に青山会館のロビーで待機してもらった。青山会館の関さんの告別式を行う会場に入った祐介は、遺族たちは礼して寺田さんと速水さんに合流した。純太は祐介に、「告別式に来ると思ってました」と言った。祐介は、「何とか間に合ったので良かったです」と言って速水さんの隣のイスに座った。喪主(もしゅ)である関さんの父は遺族代表として参加者に感謝の挨拶した。会場にきたお坊さんはお経を唱えて木魚(もくぎょ)を叩いて亡者を清めて弔う儀式を行った。祐介は遺族たちの後に続いて一人ずつ礼をして抹香を摘んで香炉(こうろ)に落として数珠をかけた手で手を合わせて礼して焼香したときに関さんの幼なじみと思われる二人を見受けた。祐介は遺族たちの中で関さんの殺害を通すには圧がかかるのでどう見ても速水さんを疑うような余地がなかったことで犯人は別にいると見直した。祐介は遺族たちの後に続いて一人ずつ棺の中の関さんに花を添えて最後のお別れをした。祐介は関さんの告別式が終わった後で関さんの幼な

じみと思われる二人に勇気を持って問いかけてみた。祐介は関さんの幼なじみと思える一人に、「君たち関さんの友人ですか？」と聞いた。関さんの幼なじみと思われる一人は、「はい！ 幼い頃からの友人です」と答えた。祐介は、「名簿に載っていたのを見ました。君たちの名前を教えてくださいませんか？」と聞いた。関さんの幼なじみと思われる一人は、「村上麗奈（むらかみれいな）と答えた。関さんの小柄で幼なじみと思われる一人は、「松田萌（まつだもえ）です」と答えた。祐介は、「俺は関さんのバラエティ番組企画部の竹本です。車で火葬場まで連れて行きましょうか？」と聞いた。麗奈と萌は、「お願いします」と答えた。祐介はロビーで待機していた智宏と麗奈と萌と一緒に青山会館から出て専用駐車場に停めてある車に乗って遺族たちが向かった火葬場へ向かった。車で移動中に祐介は麗奈と萌に関さんが亡くなる前のことについて訪ねた。祐介は麗奈に、「俺たちは富士テレビの企画部の者です。関さんがアシスタントをしていたバラエティ番組と一緒にやらせてもらっていました」と言った。麗奈は、「じゃあ！ プロデューサーなんですか？」と聞いた。祐介は、「いや！ ディレクターのほうだ！」と答えた。智宏は麗奈に、「自分ただのADだ！」と言った。麗奈は、「ADはこき使われるだろう！」と言った。智宏は、「自分もいつかはプロデューサーになるからね！」と言った。麗奈は、「頑張ってくださいね！」と言った。祐介は、「関さんは以前から嫌がらせ迷惑メールに頭を悩ませていたと聞いたけどどんなこと知ってる？」と聞いた。麗奈は、「私は聞いてないので知らない」と答えた。祐介は、「関さんの親友なのにならないなんて？」と聞いた。麗奈は、「そんなことがあったなんて私になにも教えてくれなかった！」と答えた。萌は祐介は、「私は知ってる！」と言った。祐介は、「どんなこと知ってる？」と聞いた。萌は、「麗奈には心配性だから黙っていてほしいんだけど、最近、変な男に、『バラエティ番組の司会者の速水純太と熱愛中のようだけど、今すぐ別れなければおまえを殺して細かくバラバラにして山のあちこちに隠してやる』と脅された迷惑メールでした」と答えた。祐介は、「そうですか！」と言った。萌は、「亜希子は殺害予告された恐怖と不安が募（つ）る中で打ち明けてくれた」と言った。祐介は、「酷いですね！ バラバラ事件を起こす犯人は証拠を隠そうと細かくするとところから神経質で几帳面なA型が多くて小心者だから自分より弱い子供か女か年寄りぐらいしか殺せないはずだ！」と言った。萌は、「わ！ 怖いですね！」と言った。祐介は、「関さんは殺された可能性がある。何者かに首を絞められてクローゼットの中で自殺に見せかけた犯行に及んだ者の仕業だ！ 死体放棄したら事件だとバレるから証拠を隠そうとしたんだ」と言った。祐介は麗奈に、「関さんは人に恨まれたり憎まれたりするようなことがあった？」と聞いた。麗奈は、「そのようなことはありませんでした」と答えた。智宏は、「関さんは裏腹で腹黒い性格だったのか？」と聞いた。麗奈は、「腹黒じゃない！」と答えた。萌は智宏に、「きつと亜希子に嫉妬の妬みや僻みがあったんじゃないかな！」と言った。祐介は、「嫉妬とは犯罪の動機だ！ いたい誰から嫉妬されていた？」と聞いた。萌は、「さあ！ わからないです」と答えた。智宏は、「それりゃあんまりだな！ なんで関さんはそんな酷い仕打ちを受けたんだ！」と言った。火葬場に着いた祐介と智宏と麗奈と萌は、駐車場に車を停めて車から降りて智宏だけ車で待機して火葬場で遺族たちと寺田さんと速水さんに合流した。祐介は遺族たちの後に続いて、棺の中の関さんに最後のお別れをして葬儀係員が火葬室に関さんの遺体を入れた。祐介は関さんの遺体を火葬中に遺族たちと精進落としての食事して関さんの遺体の火葬が終わったら関さんの父と母と兄妹と親戚と友人と関係者が遺骨を壺に入れていった。関さんの父と母は火葬場の出口で遺影と遺骨の入った壺を持って遺族たち一人ずつに感謝の挨拶

拶をして見送った。関さんの父と母と兄妹は遺族たちと火葬場で解散した後でお寺に遺骨の入った壺を預けて葬(ほうむ)る墓に納骨するまで四十九日を待つことにした。祐介と智宏と麗奈と萌は駐車場に停めていた車に乗って火葬場を離れて麗奈と萌を最寄駅に降ろして芝浦探偵社に向かった。芝浦探偵社に向かった祐介と智宏は、裏にある倉庫で髭を外してスーツのバッチを外して普段着に着替えた後で変装用グッズを閉まった。祐介と智宏に、「なぜ怪しげな男が関さんの住んでいたサイエンス参番館から消えたのかを調べてくる」と言った。智宏は、「わかりました。僕は行く必要はないですね!」と言った。祐介は、「俺一人で調べたいことがあるから、その必要はない」と言った。芝浦探偵社から出た祐介は、車から降りてサイエンス参番館近くの公園のベンチに座って考えていた。祐介は16時頃に都内の公園で犬と猫がフンをするからのけてあったはずの砂場で遊んでる子供たちの話し声を聞いた。少年Aは少年Bに、「こないだ火災訓練で屋上にヘリコプターが来た!」と言った。少年Bは、「ホント!!」と言った。少年Aは、「これ!」と言ってスマホで撮った動画を見した。少年Bは、「すごい!」と言って頷(うなず)いた。閃(ひらめ)いた祐介は近づいていった少年Aに、「その動画! いつ撮ったの?」と聞いた。少年Aは、「4日前だった!」と答えた。祐介は、「どこで撮った?」と聞いた。少年Aは、「お家で!」と答えた。祐介は、「お家などどこだ?」と聞いた。少年Aは、「一番上の端っこ!」と答えた。祐介は関さんの住んでいたサイエンス参番館の向かい側のサイエンス式番館の一番上の端っこだちょうど目の前だなどと思った。祐介は少年Aに、「その動画を送ってほしいんだ!」と言った。少年Aは、「いいよ!」と言った。祐介は、「じゃあ! メールアドレスを教えるよ!」と言った。少年Aは、「やり方がわからない!」と言った。祐介は、「わかった!」と言って少年Aからスマホを借りて写真から動画を選んでメールアドレスを入力すれば自分のスマホに送って少年Aに、「ありがとう!」と言って少年Aにスマホを返した。祐介は公園のベンチに座って動画を確かめてみたら、関さんの住んでいた家の隣に住んでいる人が訓練でベランダから救助されてヘリコプターに乗っていったのを見て隣り人が防犯カメラに映った怪しげな男と同じ格好をして顔がはっきりと映ってこれが怪しげな男の正体かと思った。祐介は関さんの住んでいた家の隣りの人が怪しげな男ではないかと思っ、どこで隣りの人が入れ替わったのかサイエンス参番館の関さんの住んでいた隣りの家の1502号室に訪ねてみようと思っ、公園を通ってサイエンス参番館へ向かった。サイエンス参番館に着いた祐介は、サイエンス参番館の入口で1505を入力してなにかプッシュホンを押してみたが、不在で誰も出て来なかった。諦めた祐介はサイエンス参番館前に停めていた車に乗って芝浦探偵社へ向かった。芝浦探偵社に着いた祐介はスマホで寺田さんのメールにサイエンス参番館で火災訓練のときの動画を送って関さんの隣り人が救助されてる映像に見覚えがないか確かめてもらった。祐介は返ってきたメールをみたら、美優は、「某バラエティ番組の田中プロデューサーですよ!」と送ってきた。祐介は、「ありがとう!」とメールを送ったら美優は、「どういたしまして!」と返ってきた。祐介はサイエンス参番館の火災訓練時で使われたヘリコプターが一番近くの緊急用輸送の公共ヘリポート飛行場の芝浦ヘリポートに連絡してみた。祐介は芝浦ヘリポートに電話をかけた。芝浦ヘリポート係員は、「芝浦ヘリポートです」と言った。祐介は芝浦ヘリポート係員に、「芝浦探偵社の竹本です」と言った。芝浦ヘリポートの係員は、「どのような用件でしょうか?」と聞いた。祐介は、「調査のご協力お願いします!」と答えた。芝浦ヘリポート係員は、「わかりました」と言った。祐介は、「5日前にサイエンス参番館の火災訓練で人を運ぶために使われたヘリコプターがありますかね?」と聞

いた。芝浦ヘリポート係員は、「はい調べます・・・ありました」と答えた。祐介は、「ヘリコプターレンタルしてますか?」と聞いた。芝浦ヘリポートは、「一時は貸し出しを中止してましたけど、貸し出てる」と答えた。祐介は、「利用者はいつも消防庁の方とかですか?」と聞いた。芝浦ヘリポート係員は、「民間の消防団体です」と答えた。祐介は、「どこの消防団体が教えてくれないですか?」と聞いた。芝浦ヘリポート係員は、「個人情報ですから教えることができません」と答えた。祐介は、「わかりました。ありがとうございます」と言って電話を切った。祐介は田中プロデューサーが最初から関さんを殺すつもりで家を訪ねてなんらかの理由で口論となって関さんの真つ赤なバラのヘアバンドで束ねた髪を解いて頭からぐさぐさにした髪から真つ赤なバラのヘアバンドの輪っかを首に通して首を絞めて殺害して関さんをクローゼットの衣紋掛けに吊るして自殺に見せかけて15階もあるマンションのベランダから協力者の隣りの人の家へ移動して住民に火災訓練していたとごまかして避難はしごを使わず救助用ヘリコプターから救助隊が下ろした縄はしごを命綱をかけながら上って行ってヘリコプターに乗り移ってヘリコプターが上昇したら前進して行って芝浦ヘリポートに着陸したと推理した。祐介はあすの朝からお台場ね富士テレビに行つて田中プロデューサーを調査しようと決めて芝浦探偵社で21時の閉店になるまで他の案件の書類整理をして足立区のぼろアパートに帰宅した。翌朝に起きた祐介は顔を洗つてレンジで温めた揚げカレーパンを食べてルイボスティーを飲んで歯を磨いて服に着替えてぼろアパートから出て電車に乗つて駅に着いて芝浦探偵社に社出した。祐介は智宏に、「おはよう! 今から関さんの住んでいた家の隣りに住んでいる人がサイレンス参番館の火災訓練で救助されていたことで判つた。隣人は共犯者で隣人と入れ替わつて救助されたのが田中プロデューサーだ! それが怪しげな男の正体と暴いた。今からお台場にある富士テレビ局に行つてくる」と言つた。智宏は、「よしわかつた! これは華やかな表社会に秘密結社のいびり屋が潜んでるかもしれない。なにかありそうだな!」と言つた。智宏は、「気をつけて行つても危険に近づいて行けば絡まるからな!」と言つた。智宏は、「自分も行くよ!」と言つた。祐介と智宏は裏の倉庫で変装グッズを取り出して、バラエティ番組の電飾会社の作業員に扮するためにバンドナを頭に巻いて工具などを装備した。祐介と智宏は芝浦探偵社から出て車に乗つて富士テレビ局へ向かつていった途中でレインボーブリッジを渡つて台場出口で降りて富士テレビ局に着いて地下駐車場に車を停めて富士テレビ局に入った。電飾会社を装つてスタジオに入ることができた祐介と智宏は、富士テレビ局の案内で大道具の建てたバラエティ番組舞台セットに電飾を取り付ける作業をするため、電飾会社の作業員に混じつてタダ働きをした。現場の監督は祐介と智宏に、「見知らぬ顔だな!」と問われた。祐介は、「派遣で来た竹本です」と言つた。智宏は、「自分も同じ派遣で来た安井です」と言つた。現場の監督は、「そうか! わかつた!」と言つた。祐介は、「お願いします」と言つた。智宏は、「慣れてないのでお願いします」と言つた。現場の監督は作業員のチーフに、「見習いの二人に電飾ケーブルを取つてきてもらうから倉庫を教えてやつてくれ!」と言つた。作業員のチーフは、「わかりました」と言つて祐介と智宏を倉庫へ連れていった。作業員チーフは祐介と智宏を連れて貨物エレベーターに乗つて3階まで上がつて倉庫に入つてた皆さんの電飾ケーブルをカゴ車に入れた。作業員チーフは祐介と智宏に、「この倉庫はお化けが出るという噂があるから気をつけて!」と言つた。祐介は、「マジですか! この倉庫は都市伝説があるとか!」と言つた。智宏は、「この倉庫は照明が付かなかつたら怖くて仕方ない!」と言つた。祐介と智宏は作業員チーフと一緒に倉庫から出て貨物エレベーターに乗つて1

階に下りてスタジオに入って電飾取り付け作業をした。祐介と智宏は電飾取り付け作業が終わってバラエティ番組の舞台セットがすべて完了してバラエティ番組のリハーサルと本番待ち時間になった。祐介は台本を片手に今日のゲストとレギュラー陣と司会の速水純太とアシスタントの寺田美優とディレクターの西川慎二(にしかわしんじ)とプロデューサーの田中功夫(たなかいさお)の名前を見た。西川ディレクターと田中プロデューサーがスタジオに来たら今日のゲストとレギュラー陣と速水さんと関さんの代理の寺田さんが入って来てバラエティ番組のリハーサルが始まった。祐介と智宏はバラエティ番組で速水さんが、「おもしろ動画いきなりドン！」と言って始まってリハーサル本番の収録が終わるまで見守るだけだった。3時間後、祐介と智宏はバラエティ番組のすべての収録が終わって電飾ケーブルと照明器具などな片付けに入った。作業員チーフは祐介と智宏に、「電飾ケーブルを外していくんで全部をカゴ車に積んで倉庫に運んでおいて！」と言った。祐介と智宏は、「はい！」と言った。祐介と智宏は作業員チーフが電飾ケーブルを外していったる間に田中プロデューサーを追った。祐介と智宏はスタジオから出て田中プロデューサーが通路を歩いているところを後ろから問いかけた。祐介は田中プロデューサーに、「待ってくださいませんか！」と言って留めた。田中プロデューサーは、「なんだよ！」と言った。祐介は、「あなたは関アナを殺した犯人だ！ 関さんの家を訪ねてからなにか口論となって髪から外した真っ赤なヘアバンドで首を絞めて殺害した」と言った。田中プロデューサーは、「なんの言いがかりだ！ 押し付けがましい行為はやめてくれ！ 電飾会社にクレームを入れておくからな！」と言った。祐介は、「これが証拠ですよ！」と言ってスマホでサイエンス参番館の火災訓練の模様を見した。田中プロデューサーは、「CG合成かなにかじゃないのか！ 関アナの近隣の者は知らない！」と言った。智宏は田中プロデューサーに、「しらばっくれるな！ 自惚れるんじゃないよ！」と言った。田中プロデューサーは、「黙れ！」と言って怒鳴ってタチの悪い大道具の手下を呼んだ。祐介と智宏に、「スタジオに戻るぞ！」と言ってスタジオに戻った。無防備な祐介は押し寄せる大道具の手下どもにスタジオで見つけた時代劇の殺陣(たて)で使われる木刀を持って立ち向かった。祐介は大道具の手下どもが殴ろうとしてきたが、木刀で手下どもの腕を払って頭と顔を打って腹を突いた。臆病者の智宏は大道具の手下どもが殴りかかろうとしてきたが、電飾ケーブルを振り回して手下どもの頭と顔を打った。祐介と智宏は大道具の手下どもと乱闘中に舞台セットが崩れた。祐介はトンカチを持って襲いかかってくる田中プロデューサーの腕を払って顔を左右に打って頭を打って胸を突いてカゴ車に振り落として決着をつけた。作業員チーフは祐介と智宏に、「おまえたちはなにをやってるんだ！ クビだ！」と言った。祐介は、「俺たちは探偵だ！」と言った。智宏は、「電飾会社の派遣の者じゃないぞ！」と言った。作業員チーフは、「なに探偵だあ！」と言った。そこに汚職警官を捜査していた警視庁湾岸東署殺人課の藤重刑事が現れた。丸腰の藤重刑事はカゴ車から田中プロデューサーを力起こして腕に持ったトンカチを奪って尋ねた。藤重刑事は田中プロデューサーに、「湾岸東署の誰かがおまえらに賄賂を取って悪巧みをしている者がいる！ そいつは誰だ？」と聞いた。田中プロデューサーは、「知らないな！」と答えた。藤重刑事は、「いわないと容赦ないぞ！」と素手で田中プロデューサーの頭になんとかゲンコツを食らわした。田中プロデューサーは、「わかった！ それは岡江刑事だ！」と言った。大道具の手下どもが藤重刑事に殴りかかろうとしたが、柔道殺法の一本背負いで投げ去った。藤重刑事は、「田中功夫！ アナ殺害容疑で逮捕する。詳しい話は署で聞かしてもらおうか！」と言って田中プロデューサーを湾岸東署に連れていった。スタジオにやって来た警官隊

は道具の手下どもに、「静まれ!」と言って道具の手下どもを取り押さえた。警官隊の一人は祐介と智宏に、「おまえたちもか!」と言って祐介と智宏を取り押さえようとした。祐介は、「俺は探偵です。あそこにいる寺田アナから依頼を受けて事件の調査をしました」と言った。智宏は、「自分も探偵です」と言った。美優は警官隊の一人に、「そうですね! 亜希子は殺された可能性があると思って依頼しました」と言った。警官隊の一人は、「そうですね! わかりました」と言って離れていった。祐介は美優に、「やっと犯人を捕まえました」と言った。純太は祐介に、「探偵だったなんて! 迫真の演技でした。なぜ田中プロデューサーが亜希子を殺したんだ!」と言った。祐介は、「まだ田中プロデューサーが関さんを殺したとは決めつけない!」と言った。3ヶ月後、東京地方裁判所でひそひそとらしく素知らぬ顔して現れた田中功夫被告人46歳がアリバイを自供して凶暴的な憎悪が迫る中で動機を供述して弁護士の浅田章太郎(あさだしょうたろう)と懸念した検察官の長谷川検事が事件の真相に対立した。吉澤裁判長は田中被告に、「関さんを悪議ある目的で首を絞めて殺害しましたか?」と尋ねた。田中被告は、「私は関さんを殺してない!」と答えた。長谷川検事は吉澤裁判長に、「田中被告は関さんの殺された日にスケジュールの忙しい中を殺害目的で関さんの家を訪ねて関さんの髪を束ねた真つ赤なバラのヘアバンドを外して輪っかから関さんの頭に通して首を締めて殺害してクローゼットの中で自殺をしたように見せかけて関さんの隣りの家に住む友人のところにベランダから移って火災訓練でベランダから救助されたようにしてヘリから下ろされた縄はしごを上って逃げた」と言った。吉澤裁判長は、「田中被告の部下は、その日に一緒に仕事していたと証言しています」と言った。長谷川検事は、「そんなまやかしなど信じない! はったりが多い」と言った。吉澤裁判長は、「皆さん静粛に!」と言った。浅田は吉澤裁判長に、「意義あり! 私が思うに関さんと田中被告はなんの因果関係もなく職場で活動していて淡い恋心を持って関さんに結婚相手が見つかったから恋愛成就(れんあいじょうじゅ)が実らなかったからといって深い嫉妬心はなかったはずですよ」と言った。長谷川検事は、「関さんの暮らす家の近隣者は田中被告と同じ宗教団体で山村誠司(やまむらせいじ)という共犯者です。関さんは煙たがる上司の田中被告に暴言パワハラとわいせつ言動セクハラと束縛するモラハラを受けて田中被告を軽蔑して許せない目で見てました。某バラエティ番組では西川ディレクターが選んだ司会の速水さんと結ばれることになったと知って嫉妬するようになって同じような屈辱を浴びさせようと宗教団体にいる信者を集めて反抗に及んだ。関さんはただなにも配慮がつかない中で嫌がらせ迷惑メールなどの因縁を撃退しなかった。憶測だけでものわいてるわけではありませんが、その事は富士テレビの寺さんから直接お話を聞かせてもらいました」と言った。吉澤裁判長は、「それは妬みの犯行だと証明できますか?」と聞いた。長谷川検事は、「それを目撃した少年がスマホで動画を撮ってます」と言った。浅田は、「道理が合わない! それはCG合成のアプリだ!」と言った。吉澤裁判長は、「まだ小学生の子でそのような技術を持つてるとは思えません! 高額なお金もかかります」と言った。吉澤裁判長は田中被告に、「速水さんとの結婚を妬んで関さんに殺人予告するなど嫌がらせ迷惑メールをしましたか?」と聞いた。田中被告は、「してません! 関さんに興味がなく恋の未練などありませんでした」と答えた。吉澤裁判長は、「法廷の場で嘘をつきますと偽証罪に問われます」と言った。浅田は、「関さんの幼少期は貧困家庭で育ち児童虐待を受けて多重人格症を患いました。その障害を乗り越えてアナウンサーの道を選んで色々な人格が現れて人を苦しめたり巻き添いにした」と言った。吉澤裁判長は、「被害者の悪口は恐喝罪と名誉毀損で侮辱罪に課せられ

ます」と言った。長谷川検事は、「辻褄が合わない！ これでは卑怯者にやられます。この悪いじめが流行らないうちに巧妙な口で仕掛けられた陰謀の罠を止めたい！ ここに湾岸東署捜査課に勤務してる岡江刑事が真実を述べたいと言ってます」と言った。岡江刑事は吉澤裁判長に、「私は50歳まで署内いじめを受けて安月給で年金も退職金も少ないまま定年退職を迎えることに最後の生活に不安を感じて自害して殉職を考えていたときに酒場で出会った田中に励まされて、『頼みごとがある』と頼まれて引き受けてしまったって賄賂をとって自宅捜査時に関さんが暮らしていた家のベランダの窓に鍵がかかってない鍵を締めて防犯カメラに映った姿などなかったことにした」と言った。吉澤裁判長は、「収賄罪と懲戒免職と謹慎処分は免れません！」と言った。長谷川検事は、「スタジオにいた大道具の手下どもは皆んな田中被告から賄賂を取って雇われた共犯者です。他にいたかもしれません！」と言った。吉澤裁判長は、「最後にもう一度だけ訪ねますが、関さんの首を締めて殺害しましたか？」と聞いた。田中被告は、「私が関さんを殺害しました。新人アナウンサーとして入社した時から関さんに興味があってなんか誘いました。その度に断られて速水さんと結婚が決まった時から嫉妬を抱いて関さんを誰にも渡したくない気持ちで殺害した」と言って犯行を認めた。吉澤裁判長は、「極めて悪質で凶悪である確信犯の田中被告は一人の女性を惨めにして犠牲にしたこと有罪である」と言って判決を下した。吉澤裁判長は血も涙もない悪党の田中被告に制裁の罰を与えた。正義感があると思えない岡江刑事は、すぐに暴力を振る舞うような気の荒い田中被告にハメられて職を失って妻子に逃げられて生涯孤独な人生で終わることを覚悟した。裁判所に来ていた速水さんと寺田さんは田中被告の推定無罪じゃなく有罪に喜んだ。バラエティ番組の（いきなりドン！）は訃報があったために打ち切りになった。週末土曜日の昼に関さんの墓で美優と会って話した後で美優と関さんを供養して墓参りした。祐介は美優に、「やっぱりここに来てましたか！ もう決着がつかしましたね！」と言った。美優は、「ありがとうございます。きつと天国で亜希子も喜んでくれてると思います」と言った。祐介は、「関さんは上司に迫られるセクハラを受けてた。憶測なんて当たらないものですね！」と言った。美優は、「そうですね！ その事は結婚を誓った速水さんに知られたらどうしようかと思うと、いえなかったんでしょね！」と言った。祐介は、「と思います」と言った。美優は、「まだ請求書は届いてません！」と言った。祐介は、「今日送ったので明後日までには届くでしょう！」と言った。美優は、「請求書が届いたらすぐに払います」と言って関さんの墓から離れていった。田中容疑者は報いを得て決戦の日が終わった。田中功夫は何年かして刑務所を出たとしても職がなく廃人になってる。速水さんはショックしてメンタルを弱めてお笑い芸人の相方と解散してら芸能界を引退して姿を消した。翌朝に起きた祐介は、顔を洗ってカスタードクリームパンを食べて温かいミルクティーを飲んで歯を磨いて洋服に着替えて家を出て電車に乗って芝浦探偵社に出社した。祐介は智宏と一緒にいつもの仕事を始める前のホットコーヒーを飲みながら話していたら同僚の孝治と修造が近づいてきた。孝治は祐介に、「今回の案件は見事でした。今まで酷い事いってすみませんでした。やればできるじゃないですか！」と言った。祐介は、「現実が悪夢じゃなくて夢は現実にするものだ！」と言った。修造は智宏に、「見直しました。今まで見損なっていたことはすみませんでした。」と言った。智宏は、「失敗を恐れてたらなにもできない！ ただそれだけだ！」と言った。祐介は、「俺たちは2週間後に芝浦探偵社を退職することに決めた」と言った。孝治は、「退職する？」と聞いた。祐介は、「前から計画していた探偵事務所を立ち上げることにした」と答えた。修造は、「ホントなんですか？ どこに？」と聞いた。

祐介は、「ホントだ！ 足立区から赤坂に探偵事務所を置いて引越りするよ！」と言った。智宏は、「自分も探偵事務所に移籍する」と言った。孝治は、「いいですね！ 俺たちも探偵事務所を持ちたい！」と言った。修造は、「羨ましいですね！ 早く探偵事務所を立ち上げよう！」と言った。祐介と智宏は2週間後に竹本探偵事務所を立ち上げて赤坂に引越して外車のローバミニを購入した。私立探偵になった祐介と智宏はスタッフに女性の早川真紀（はやかわまき）を採用して事務所近くで見つけた保護猫のキャラクターを飼って謳歌した。竹本探偵事務所に始めて依頼をしてきた朝の通学で電車のラッシュ時に起こる痴漢被害に苦しむ高校1年生の前田靖子（まえだやすこ）でした。靖子は真紀に、「朝の通学時に電車で三十代の男の人がいつも近寄って触れてきて身動きが出来なくなって声も出せようもなかったんです！」と言った。真紀は、「そうなのか！ 意外に30代で4大卒で妻子がいる家庭持ちで正装したサラリーマンがよくクリニックを訪れるらしいよ！」と言った。靖子は、「どうにかして、電車の痴漢を抑えてくれませんか？」と聞いた。真紀は、「衣服の上からなら痴漢で衣服の下からなら強制わいせつになる。狙われやすいMは襲われやすいから被害が酷くならないうちに調査して抑えよう！」と応えた。靖子は、「お願いします！」と言った。真紀は、「わかりました」と言っって犠牲を払ってやりたいと思った。祐介はすでにもう一つの案件で闇バイトで剥奪する何者かに強盗と窃盗を要求された少年が脅迫を受けて苦しんで竹本探偵事務所に相談してきたことで調査を始めた。祐介は探偵業は無防備で危険だからだと認識してるから、これからも気を張ってやっていくことに熱意を持って挑むことにした。（終わり）

二人は探偵

著 者 八島 聖彦

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
